

## ユリスナイ

### 1

「リグト、明日から修業の塔入りだ。君もいよいよ貴族の仲間入りだよ」

導師からそう言われて、教室を出ようとしていたリグトは振り返りまわりました。肩のあたりで切りそろえた黒髪に整った顔立ちの少年です。歳は十三でしたが、背が高いのもう少し年上に見えます。いえ、大人びて見えるのは、そのまなざしのせいかもしれません。薄い青い瞳はひどく冷静で、子どもらしい感情や感動を少しも外に表していませんでした。ただ、淡々と導師を見返しています。

導師は口ひげを生やした中年の男でしたが、そんな少年に苦笑いをして言いました。

「相変わらず冷静だな、君は。嬉しくないのかね？　いくら天空の国の魔法使いでも、修業の塔に入れるのはごく一部の者だけだ。それだけの实力がある、と認められたのだよ。修業明けには君も晴れて貴族の一員だ」

そこは天空の国でした。世界の上空を音もなく飛び続けている魔法の国です。

住んでいる人々は全員魔法使いですが、その实力には人によって差がありました。大半は日常生活に魔法を使いながら普通に暮らしていますが、中には桁はずれた魔力を持つ者もいて、彼らは特別な学校で

学び、修業の塔で修業をしてから貴族になります。天空王の命令の下、地上へ降りて、正義と平和を守るために働くのです。

リグトは導師に答えました。

「いずれこうなるだろうと考えていましたから。もっと早く修業の塔に呼ばれるかと思っていたから、むしろ遅すぎたくらいです」

師を相手に不遜にも聞こえる口調ですが、生意気な調子はありません。少年はただ事実を語っているだけなのです。

導師はまた苦笑しました。

「まったく相変わらずだな……。まあ、数百年に一人の逸材と言われる君だから、そう考えるのも無理はないかもしれないが。修業は明日の日の出からだ。夜明け前に修業の塔まで来なさい」

わかりました、とリグトは答えました。本当に、導師から褒められても、照れるでも嬉しがるでもありません。当たり前のことを言われたように、淡々と受け止めているだけです。

そんな少年に、ふと導師は心配顔になりました。

「先日の一件をシューバが根に持っているようだ。気をつけなさい」

少年の顔が初めて表情を浮かべました。意外がる顔つきです。

「シューバ？　彼がどうして」

「彼が試験で不正したことを君が見破ったからだよ。あの事件で彼は大きく後退した。本当は君より先に修業の塔入りするだろうと言われていたのだ」

けれども、少年は不思議そうに言いました。

「それで何故？　不正をしたのは彼です。罰を受けるのは当然ではないですか」

「人はそうそう潔いものではない。自分が悪いことをしたと考えて反省するより、それを見つけて告発した者を逆恨みすることのほうが、はるかに多いのだよ。君には理解できないかもしれないが……。と

「かく気をつけなさい」

「わかりました、と少年はまた答えましたが、その顔は他人事の表情のままでした。」

幸い翌日まで導師が心配するような妨害はなく、リグトは予定通り、未明に天空城へ行くことができました。国で一番高い山の上にそびえる天空城に、修業の塔があったのです。窓も入り口も一つもない石造りの円塔で、相応の魔力がある者でなければ中には入れません。リグトは難なく塔に入り込むと、待っていた導師たちの前に立ちました。

「よう来た、リグト」

と責任者の老人が言いました。塔長とうちやうと呼ばれる魔法使いです。白いひげをしごきながら言います。

「そなたはこれから半年間、この塔でさまざまな修業を積むことになる。ここでは今現在も大勢の者が修業をしているが、互いに別々の空間にいるので、決して顔を合わせることはないし、修業の内容もそれぞれで違っている。半年間、そなたが会うのはそなたの導師たちだけだ。初めは過去見かこみの修業から。何か質問はあるかね？」

「何故、最初が過去見の修業なのですか？」

とリグトは尋ねました。

「魔法使いはまず己を充分に知らなくてはならない。自分のここまでの道のりを振り返るためだ」

と塔長は答えました。リグトはうなずき、塔長や導師たちが塔の部屋から立ち去っていくのを見送りました。導師たちが送り込む巨大な修業の魔法を、リグトは一人で受け止め、こなしていかなくてはならないのですが、それを不安に思うこともありませんでした。

すると、導師が塔長に話しかける声が聞こえてきました。

「彼は次期天空王と言われている子どもです。修業もかなりの内容になるでしょうね」

「だが、彼には天空王となる決定的なものが欠けておる。彼はそれを見つけねばならん」

と塔長が答えます。

導師たちはリグトとは別の部屋に移動して、そこで話をしていました。彼らは非常に優秀な魔法使いなので、その会話も魔法で隠されていて、本来ならば聞くことはできません。けれども、リグトは特別優れた魔法使いの耳を持っています。その気になれば、導師たちの内緒話も簡単に聞き取れるのです。

導師の一人が塔長に尋ねました。

「天空王になるのに決定的に欠けているもの？ それは何でしょう？」

「慈愛だ。彼には人を思いやる心というものが不足している。正義の心を持つのはよいが、あまりにも物事を善と悪だけで考えすぎる。人の心も世の中も、それほど単純に割り切れるものではない。ユリスナイの慈愛を感じる事ができない者は、天空王にはなれないのだ」

「天空王様は先日地上から戻られてから、体調を崩されています。間を払うために力を使いきったのです」

と別の導師が言いました。

「天空王様に万が一のこともあれば、彼に天空王の冠が回ることでしよう。天空王様が、彼を自分の後継者と認めておられるのですから。修業は間に合うでしょうか？」

「天空王様も、今すぐどうこうということはないだろう。時間をかけて教えていくしかない。だから、彼には過去を見せるのだ。彼は力がありすぎて、早くに親元から引き離されてしまった。親から慈愛の心を教えてもらってきていないのだ。彼が生まれた時や、幼かった頃の様子を見せることにしよう。その中から慈愛を見いださせるのだ」

やれやれ、トリグトは心の中で肩をすくめました。

導師たちの会話は、すぐ隣で話しているように、ありありと聞こえてきます。ぼくの過去ねえ、とまるで大人のように心でつぶやいてしまします。

自分が次期天空王候補になっている話は、今までにも何度も聞かされてきました。そのこと自体は別になんとも思いません。自分には誰よりも優れた魔力がある、という自負があったので、それが当然だと思っていたのです。正義を守り、悪を退ける心も劣っていないつもりでした。自分では、天空王となるのに何一つ足りないものはないつもりでいるのに、いつも、導師たちは言うのです。君には足りないものがある。ユリスナイの慈愛を感じなさい、と。

慈愛とは他人を大切に想う心、他人に優しくする気持ちのことです。ちゃんとやっているじゃないか、と思います。自分は誰のことも傷つけない、だましたりしません。およそ悪いことや不正なこともしませんが、弱い人や困った人がいれば助けますし、悪事を働く者は決して許しません。まさかユリスナイだって、悪い奴にまで優しくするとは言わないはず。誰の前でも顔を上げ、正義の光を見ながら正しい道を歩いているつもりなのに、大人たちからしつこく慈愛を説かれることに、少年は正直うんざりしていました。

それに

「それに、どうせ過去を見に行ったらって何も無いんだから」

トリグトはつぶやきました。導師たちにも聞き取れないくらい低い声です。

自分が生まれた時や幼い頃の様子を見れば、親の慈愛を感じられるだろう、と塔長は言います。でも、リグトは覚えているのです。自分が親元を離れて特別な学校に入るまでの四年間、両親が自分を恐れていたことを。

リグトはあまりに魔力が強すぎたのです。どれほど小さな魔法を使おうとしても、それは巨大な魔法の発動となって、家を壊し、周囲の者たちを巻き込んでしまいました。彼の両親はごく普通のレベルの魔法使いだったので、そんな彼の魔法を抑えることができませんでした。ただただ息子の魔力を恐れ、巻き込まれないようにと離れていたのです。かといって、見捨ててしまえば、それはそれで息子の恨みを買ってしまう、姿を消すこともできず。

リグトは転んでも母親から助け起こされた覚えがありませんでした。歩き疲れた時に父親に背負ってもらった記憶もありません。いつだって、転んだら自分で立ち上がりました。疲れたら自分の魔法でなんとかしました。両親はいつもリグトから見える場所にいました。でも、彼らは決して自分のそばには来なかったのです。

そんな過去を見に行ったらって慈愛なんか見つかるもんか、トリグトは淡々と考えました。皮肉に笑うことさえありません。結局は、自分に力がありすぎただけのことなのです。特別な者が特別の生き方をするのは当たり前なことだと思っていました。特別な自分に両親がいないことだって、当然のことなのだ。

すると、リグトの耳に何やら騒がしい雰囲気が伝わってきました。

導師たちのいる部屋に急な知らせが入ってきたのです。

「天空王様が!？」

と塔長が声を上げたのが聞こえ、すぐに導師の一人がリグトに声だけで話しかけてきました。

「リグト、修業の開始を少し遅らせる。悪いが、ここでしばらく待っていないさい。魔法は使わないように。塔の中は場が不安定で、魔法の影響が拡大しやすいから」

リグトは思わず本当に肩をすくめました。修業を始めようという

ころに間が悪いことだ、と考えます。 天空王に何かあったらしいことについては、とりたてどうとも感じません。導師たちの話し声や気配が塔から消え、リグトは塔の中に一人きりで残されました。

ところが、リグトが座って待つていると、塔の中で気配が揺れて、誰かが外から入り込んできました。導師たちではありません。振り向くと、自分より年上の背の高い少年がすぐ後ろに立っていました。高慢そうな顔でリグトを見下ろしています。

「シューバ」

とリグトは相手の名を呼びました。以前、試験の不正を見抜かれて、リグトを逆恨みしている少年です。何も言わずに憎々しく自分をにらみつけてくる様子を見て、リグトは言いました。

「帰りました。ここは君のいるべき場所じゃない」

とたんに、シューバは、かっと顔を赤くしました。

「礼儀を知れ！ ぼくは君の先輩だぞ！」

と激しく言います。

リグトはつまらなそうにそれを見返しました。

「年齢ではね。でも実力はそれとは関係ない。ここはぼくの修業の場だ。邪魔になるから出ていってくれ」

相手を馬鹿にしているのでも、生意気を言っているのでもありません。リグトの口調は平静です。当然のことを言っているだけなのです。

シューバは歯ぎしりしました。

「リグト ちよつと力があつて天空王様に気に入られているからって、いい気になるなよ！ 貴様なんかが次の天空王になれるもんか！」

「それは君が決めることじゃないな」

とリグトは静かに言い返しました。本当に、怒る子どもを相手にする大人のような態度です。

シューバの目に怒りが暗くひらめきました。いきなりリグトに向

かって手を突きつけます。

リグトは眉をひそめました。

「よせ。塔の中は場が不安定なんだ。魔法を使ったら巻き込まれるぞ」「ぼくは巻き込まれないさ。魔法に呑み込まれるのは貴様だ！」

シューバの声が呪詛のように響き、続けて魔法の呪文を唱え始めます。

リグトは立ち上がりました。同様に相手に手を突きつけ、相手を上回る魔力の呪文を唱えます。シューバの呪文がたちまち吹き飛ばされ、一緒にシューバ自身も跳ね飛ばされて、部屋の壁にたたきつけられました。そのまま、抑え込まれたように壁から動けなくなります。

やれやれ、とリグトはシューバに背を向けました。魔法使いの声で導師を呼び出して、つまみ出してもらおうとします。

とたんに、リグトは立ちすくみました。目の前で部屋が歪んでいました。目に見えない渦がそこにあつて、向こうの景色を歪めているのです。渦はたちまち広がっていきます。

魔法が暴走した！ とリグトは考えました。元より不安定な塔の中です。シューバの呪文を跳ね返したリグトの魔法が、拡大して勝手に作動し始めたのです。まるでリグトが幼かった頃のようにです。

けれども、リグトはあわてずにまた手を向けました。暴走している魔法にもう一度魔法をかけて相殺させようとしています。そう、今はもうリグトもこういうことができるようになっていたのです……。

すると、そこにまたシューバの声が響きました。

「セバトオートグリ！」

暴走する魔法、それを相殺しようとして唱えられた魔法、そこへ飛び込んできたシューバの新しい呪文 均衡が崩れ、たちまち巨大な魔法の渦が部屋中に広がります。

「！」

リグトは急いでまた魔法を繰り出そうとしました。すべてを元に相殺させて、元の状態に……。

けれども、暴走する魔法がその魔力も呑み込みました。暴れ回る竜のようにとぐるを巻き、その渦の中心にリグトを引き込みます。

あっ、と思った瞬間、リグトは遠い遠い場所へと弾き飛ばされ

それっきり、気を失ってしまいました。

## 2

目を覚ました時、リグトはベッドに寝かされていました。草の匂いと柔らかな毛布が体を包んでいます。

少しの間、リグトは何がどうしたのかわからずにいました。ゆっくりと記憶をたどり、自分が魔法の暴走に巻き込まれて、修業の塔から飛ばされたことを思い出します。

リグトはベッドの上に起き上がりました。天井の高い部屋の中です。壁に細長い窓があつて、外の景色が見えています。窓にガラスはなく、外の空気が直接流れ込んでいます。広がっているのは一面の草原です。リグトを包む草の匂いは、草原からやってきているのです。

ベッドの横の床の上にマットがじかに敷いてあつて、毛布がたたんでありました。誰かが脇に寝ていたみたいだな、とリグトが考えていると、部屋のカーテンを押しかけて人が入ってきました。赤い髪を後ろで長いお下げに結った、若い女の人です。鼻の頭にちよつとそばかすがあつて、丸い大きな眼鏡をかけていますが、なかなかチャーミング

グな顔をしています。

女の方はリグトが起き上がっているのを見ると、大きな瞳を丸くして、すぐに笑い出しました。

「やつと目を覚ましたわね。きみ、丸一日以上寝てたのよ。大丈夫？ 気分は悪くない？」

明るく響く声で、てきはきと話しかけながら近づいてきますが、とたんにつまづいて前のめりになりました。床のマットに気がつかなくつたのです。手にしていた丸い盆を思わず放り出してしまいました。小さなポットとカップが宙を舞い、きゃあ！ と女性が悲鳴を上げます。

リグトはとっさに片手を向けました。停止の魔法をかけようとしません。

ところが、魔法が発動しませんでした。呪文が出てこなかったのです。手を伸ばしたまま茫然とするリグトの目の前で、ポットとカップが床に落ちて、ガシャン、と音を立てました。ポットの中身が破片と一緒に床やマットの上に飛び散ります。続けて盆も落ちてきて、ガラガラと激しい音を立てます。

「あーあ、またやつちやつた！」

赤いお下げ髪に丸眼鏡の女性は、床に尻餅をついたまま自分の頭をたたきました。

「どうしてこう、あたしはそっかしのかなあ。きみ、大丈夫だった？ お茶がかかって火傷したりしなかった？」

けれども、リグトは返事をするどころではありませんでした。自分の手のひらを茫然と見つめてしまいます。試しにもう一度魔法を使ってみようと思いますが、やつぱり呪文は出てきません……。

すると、復元の呪文が響きました。  
「レドモニトモーターベス」

床の上に飛び散った破片が、一カ所に集まってポットと二つのカップに戻ります。マットに広がった黒い染みも、吸い取られるようにたちまち消えていってしまいます。ポットの中へ戻ったのです。ポットとカップが盆の上に飛び乗り、その盆が女性の手に戻っていきます。

リグトは呆気にとられてそれを眺めました。一見何気なく見える復元の魔法ですが、ポットにもカップにも割れた痕はまったく残っていないし、マットも真っ白になっています。リグトくらいの実力者になれば、魔法を使う前の状態の痕跡くらい見えるのに、それさえまったくわからなくなっていました。この女性はかなり強力な魔法使いなのです。

すると、その視線をどう受けとったのか、女性が、ああ、と笑いま

した。  
「大丈夫よ、お茶にゴミなんか混ざってないから。さ、熱いうちにいただきますよ。薬草も混ぜておいたから、元気が出るわよ」

屈託なく言って立ち上がり、ベッドの脇のテーブルで茶を淹れ始めます……。

すると、そこへばたばたと足音を立てて、カーテンの向こうから別の人物が飛び込んできました。がっしりした体格の若い男性です。茶色の髪とひげの顔を真っ赤に染めて、いきなり若い女性へ食ってかかります。

「お　お　男を拾ってきたってえ！？　い、いったいどういうつもりだ、君は！！？」

「ちよっと。落ち着いてよ、ダイダ」  
と女性があきれて言いました。

「それに、男を拾ってきたなんて、何よそれ？　男って、あの子のこと？」

とリグトを指さして見せます。リグトはベッドの上でまだ呆気にと

られていました。

青年は目を丸くしました。黒髪に薄青い瞳の少年をまじまじと見つめてから、女性に聞き返します。

「男って、これのことなのか？」

「それをあたしが聞いているんでしょうよ。誰、そんな変なこと言ったのは？　さしずめカイタでしょ。やあねえ」

カイタの奴……！　と青年がまた真っ赤になって怒り、女性は笑い出しました。

「ほおんと、兄弟揃って早とちりよね、ダイダもカイタも。この子は昨日、草原の中に倒れていたの。全然目を覚まさくて、ついさっき、やっと気がついたところなのよ」

ダイダという青年は、ふうん、と腕組みしてリグトをのぞき込んできました。ごつい体つきに強面こおもての男ですが、意外なくらい人の良さそうな目をしていました。リグトよりも少し色の濃い、水色の瞳です。すぐに女性をまた振り向いて言います。

「で、何者なんだ、この坊やは？」

「さあ？　あたしもたった今、起きているところに会ったばかりだからわからないわ。ねえ、きみ、名前は？　どこから来たの？　どうして草原になんて倒れていたの？」

女性はてきぱきと尋ねながら、また茶を淹れ始めました。ローデブツカ、とつぶやき、何もなかった空間から青年のためにもう一つカップを取り出します。まるで、そこに見えない食器戸棚でもあるような仕草です。

リグトは本当に呆気にとられていました。この女性は別空間から物を取り出しています。貴族レベルの魔法使いが使う、かなり高度な魔法です。リグトはずっと貴族の師弟のための学校に通っていたので、ほとんどの貴族の顔は見覚えていたのに、この女性は一度も見たこと

がありませんでした。これほどの腕前の魔法使いなら、天空王にまみえるために城に来た折りに見かけていても良さそうなものなのに。すると、ダイダが笑い出しました。

「おい、坊やが魔法にびつくりしてるぞ。あまり脅かさない方がいいんじゃないのか？」

「あら、と女性は言い、少年の顔を見て言いました。

「違う、って顔してるわよ？ 魔法そのものに驚いているんじゃないわよ。もしかして、呪文が珍しいのかしら？」

「それも違うよ、とリグトは言おうとしました。天空の国の魔法使いが、そんなものを珍しがるはずはありません。ところが、返事ができませんでした。一言も声が出なかつたのです。

ダイダは笑い続けていました。

「そうだよなあ。こんなへんてこなことばを言って魔法を使う人間なんて、俺たち以外にはいないもんなあ」

「ちよつと。へんてことは何よ、ダイダ。失礼ね！ あたしが編み出した呪文に文句でもあるって言うの？」

「それまでの明るい顔が嘘のように、怖い顔つきで青年をにらみます。青年があわてて手を振ります。

「いやいやいや、文句なんて……！ おかげで俺たちだつてすごく助かつてるさ。魔法を自在に使えるようになったんだから。君のお手柄だよ、ユリスナイ」

え……？ とリグトは目を見張りました。

青年は今、女性をなんと呼んだでしょう？ ユリスナイ、と言つたような気がするのですが。

ユリスナイというのは、天空の民から広く信仰されている光の女神です。女神の名前をつけたんだらうか？ とリグトは考え続けました。自分で自分の名前をつけるはずはないので、親が決めたのでしようが、

それにしてもずいぶん大胆だ、とあきれてしまいます。唯一無二の光の神と同じ名前だなんて、恥ずかしいとか恐れ多いとか、考えないんだらうか……。

すると、女性が言いました。

「あたしはね、どうしても魔法を使う法則が見つけたかったのよ。行き当たりばったりで、その都度何が起きるかわからないような魔法じゃなくて、自分の意志と目的に従って、きちんと言うことを聞いてくれる魔法をね」

「特に君は、だらう、ユリスナイ？ 君の魔力は生まれつきものすごく、誰にもコントロールできなかつたもんね。呪文を見つけたおかげで、ようやく思い通りに使えるようになったんだらう？」

「そつよ。おかげでこつやつて落ち着いてお茶も淹れられるようになったつてわけ。前なら、過剰に魔法を使いすぎて家中にお茶の雨を降らせたか、お茶を熱くしすぎて蒸発させてたわね。魔法を調節できる呪文を発見した時には、本当に嬉しくて、飛び上がったわよ。でも、いいでしょ？ そのおかげで、みんなだつて同じ魔法の呪文が使えるようになったんだから。これって、世界の中にある力の、聖なる部分を引き出して使う呪文なのよ。言ってみれば光の魔法。悪さもしない、良い子よ」

「呪文は君の子どもかい、ユリスナイ。結婚もしてないのに早すぎないか？」

ちよつと妬けた様子でダイダが言いました。さりげなく、テーブルの上の彼女の手に自分の手を重ねようとします。その下から素早く自分の手を抜いて、ユリスナイは笑いました。

「あたしは魔法と結婚してるのよ、ダイダ。光の魔法を完成させるのは、あたしの一生の仕事。この世界には、まだまだ素敵な魔法や強力な魔法がたくさん隠れているの。それを見つけ出して、呪文にして本にまとめていくのが、私の役目なのよ」

言いながら、ちょっとずれた丸い眼鏡を直します。眼鏡の奥で、明るい瞳が笑い続けています。

「ちえつ、とダイダが言いました。」

「魔法なんかと結婚しないで人間と一緒になれよ、ユリスナイ。ここにも、いい男はいるだろうが」

「いい男？ それって、この坊やのこと？」

とユリスナイがからかうように答えます。言われている意味を承知の上で、わざとはぐらかしているのです。

リグトは本当に呆気にとられて、何も言えなくなっていました。この会話、この内容。この女性は自分が光の魔法の呪文を作ったと言っているのです。そんな馬鹿な、と考えます。光の魔法は何千年も前に、光の女神によって作り出されたと言われているのです。光の女神、ユリスナイによって……。

リグトは女性をまじまじと見つめました。後ろで一本に編んだ赤いお下げ髪、丸い眼鏡、そばかすの浮いた顔。チャーミングだけれど、とても女神と言える姿ではありません。服だって、デザインは古くさいのですが、当たり前の格好をしています。古くさい。何千年も昔の人々が来ていた服のような。

リグトはベッドから飛び出しました。ガラスのはまっついていない窓に飛びつき、外の景色を眺めます。首をねじると、一面の草原の向こうに、高くそびえる山が見えました。おなじみの山の形。天空の国の真ん中にあるクレラ山です。ところが、その頂上でいつも光っている天空城が見えませんでした。雲がかかっているわけでもないのに、金と銀に光る城がまったく見えません。山はただ木々の緑と岩の灰色に彩られています。

目を転じて反対側を眺めると、そこにも遠く山並みが見えています。草原が森に変わり、その向こうに青く山々がかすんでいるのです。

リグトは思わず目眩がして、窓にしがみつきました。知りません。あんな山脈が見える景色など、自分は知りません。

世界の空を飛び回る天空の国は、はるか昔には地上にありました。地上が激しい戦いに巻き込まれた時、戦火を避けて、当時の魔法使いたちが魔法で国を空に飛ばしたのです。その時から、天空の国にクレラ山以外の山は存在しなくなっていました。あるのはただ、草原と花野と町と湖、そして川。なのに、今この国には、見えるはずのない山脈が、遠く見えています。

膝ががくがくと震え出すのを感じながら、リグトは悟りました。ここは、まだ地上にあった頃の天空の国なのです。魔法で空に浮かぶ前の。リグトは、修業の塔の魔法の暴走で、何千年も昔の時代に飛ばされてきてしまったのです。

「どうしたの、きみ？ 大丈夫？」

と女性が心配そうに声をかけてきました。

リグトは青ざめた顔のまま振り向き、ユリスナイと呼ばれる女性を見つめました。

### 3

「なんだ、ずいぶん坊やが驚いてるじゃないか？」

とダイダがリグトを見て言いました。少年は真っ青になって立ちすくんでいます。ユリスナイは首をかしげました。

「本当にどうしたの？ 何をそんなに驚いているの？」

リグトは尋ねようとしてました。

今はいつ？　ここはどこ？　あなたたちは　いったい誰？

ところがことばが出てきませんでした。さつき呪文を使おうとした時と同じです。声がかたたく出なくなっていたのです。

リグトは咽に力を入れて息を吐きました。音になりません。自分の首に手を当て、強く押さえ、声を振り絞ろうとします。やっぱり声は出てきません。

リグトはうろたえ、自分の胸をたたきました。強く息を吐き出し、咳払いを試みようとします。どうしても息は声になりません。かすれ声やうめき声さえ出てこないのです。

それを見て、女性と青年は顔を見合わせました。

「しゃべれないんだわ、この子……」

「ことばを持ってないのか？」

「ううん、違うわ。必死でしゃべろうとしているじゃない。元々はしゃべれたのよ。何か原因があつて急に話せなくなったのね。かわいそうに」

女性が目を細めて手を伸ばしてきました。まるで自分が痛みを感じているような表情で少年を見て、そつとその髪に触れます。

「ローデヨエコー」

話せるようになる呪文をかけてくれます。

ところが、それでもやっぱりリグトは話せるようになりませんでした。まるで咽から声を出す器官が取り除かれてしまったようです。

「クリスナイの魔法でもしゃべれるようにならないなんて、どういうことだ？」

とダイダが驚きました。クリスナイも考え込みます。

リグトはどうとう立っていらなくなりました。膝が情けないほど震えて、体を支えることができず。その場にしゃがみ込んで、うずくまってしまいます。

とたんに、涙がどつとあふれてきました。どんな時でも冷静で落ち

着いていたはずの自分なのに、怖くて怖くて、全身が震えます。ここは自分がいた時代から数千年も昔です。自分を知っている人は誰もいません。声を出すこともできません。話すことも、魔法を使うこともできないのです。本当に、どうしていいのかわかりません。

すると、ふわりとリグトの体が抱きしめられました。ひととき濃い草の香りが少年を包みます。クリスナイがリグトに両腕を回して抱きしめてくれていました。優しい声で話しかけてきます。

「怖がらなくていいのよ。ちゃんと、あたしたちがいてあげるからね。大丈夫、なんにも心配いらないわ……」

堅くこわばったリグトの体を柔らかく何度も撫でてくれます。ダイダもそのすぐそばに立って、一緒に少年を見ていました。腕組みしたまま何も言いませんが、だからといって彼らを置いて離れていくわけでもありません。

ついに、リグトは彼女にしがみつきました。わあわあと声を上げて泣いたつもりでしたが、やっぱり泣き声は出てきません。ただ大粒の涙が頬の上を流れていきます。

そんなリグトをいっそう強く抱きしめて、クリスナイは繰り返しました。

「大丈夫よ。大丈夫。なんにも心配ないわ。あたしたちはそばにいるから。だから、大丈夫よ……」

そのことばは、どんな慰めの呪文よりも、リグトの胸にしみました。子守歌のように耳に心地よく響きます。泣きながら、すがりながら、いつかリグトはクリスナイの腕の中で眠ってしまいました。寝入りばなに、赤ん坊になった自分が母親に抱かれている夢を見ましたが、不思議なことに、その母親は赤いお下げ髪をして、丸い眼鏡をかけていました。その夢も、リグトが深く眠るとそれきりとぎれ、後はもう思い出すことさえありませんでした。

次に目を覚ました時、リグトはまたベッドに寝かされていました。一人の女性が自分をのぞき込んでいたので、思わずぎょっとしてしまいます。女性はユリスナイではありませんでした。もう少し年上で、輝くような長い銀髪をしています。とても美しい顔立ちですが、その瞳は右が青、左が金の不思議な色合いをしていました。

女性のすぐ後ろにユリスナイが立っていました。銀髪の女性に話しかけます。

「どう？ 何かわかった、シーラ？」

銀髪の女性が振り返って首を振りました。

「だめね、何も見えないわ。不思議な子。普通だったら、この子の来た場所も未来の姿も見えるはずなのに、この子のことは何もわからないのよ。占えないわ」

この人は占者だ、とリグトは気がつきました。ユリスナイが、うーん、と首をかしげます。

「シーラにも占えないってのは相当よね。本当に、この子どもから来たのかしら。もしかしたら、この世界とは別の場所から来たのかしらね？」

ある意味、それは当たっていました。リグトは今いる時代から数千年も後に生まれる人間なので……。

同じ部屋の中には他にも大勢の大人たちがいました。ダイダもいました。その隣に、見上げるような男が立っていました。がっしりした体格をして、茶色の髪とひげをしています。とても背が高いのですが、どこことなくダイダと似た顔立ちや雰囲気をしています。

すると、そんなリグトの視線に気がついて、ダイダが笑いました。「俺の弟のカイタだよ。喧嘩が二度の飯より好きな阿呆だ。まったく、

俺より三つも年下のくせに、俺より大きくなりやがって」

「力じゃ俺にかなわなくなつたからって、ひがむな、兄貴。なあに。兄貴たちに悪さするような奴が出てきたら、俺が片っ端からたたきのめしてやるよ」

とカイタと呼ばれた大柄な青年が笑います。その笑顔は兄のダイダに瓜二つでした。

「レートは？ 行商で歩いてる間に、こういう子を見かけたことはなかった？」

とユリスナイがまた別の人物に話しかけました。彼らよりもう少し年かきの男性です。かたわらに大きな荷物を下ろして、それにもたれかかっています。

「さてなあ。迷子を捜しているという話は聞かなかつたけどな。だいたい、その子のその服。そんな格好をした人を、ぼくは今まで一度も見たことがないぞ。どこから来たのか知らないが、この近辺の人間じゃないことは確かだな」

リグトは星空の衣を着ていました。黒い生地之星のきらめきを抱いている長衣で、その下に同じ生地のスポンをはいています。天空の民としては、ごく当たり前の格好なのですが、確かにこの部屋にそんな服を着ている人はいませんでした。彼らが着ているのは、一枚の布をひだを取りながらまとって、ブローチやベルトで留めつけた、古風な服装です。大昔のエルフたちが着ていたような。

すると、また別の人物が身を乗り出してきました。ユリスナイのような眼鏡をかけた青年です。リグトの星空の衣をまじまじと見ながら言います。

「実に興味深いよ、この服。魔法の呪文が織り込んであるんだよ。なんの魔法が組み込まれているのかは、調べてみないとわからないけれど、すばらしい技術だ。このやり方がわかれば、すごい服がいろいろ作れるぞ。例えば、強力な魔法から身を守る服とかね」

まさしくそれが星空の衣だったのですが、声の出ないリグトには、それを説明することができませんでした。ただ、熱心に自分の服を調べる青年を見つめてしまいます。青年は少し癖のある金髪をしています。眼鏡をかけた顔は、よく見るととても優しい顔立ちをしていて、なんだか女性のような様子……。

ユリスナイが笑いました。

「キータライトったら。こういうことになるよと本当に夢中になっちゃうんだから、相変わらずねえ」

え？ とリグトはまた思いました。さつきから聞かされる人々の名前に、なんだか聞き覚えがあります。カイタ、レート、キータライト……誰のことだっただろう？ と考えるうちに、地上の人間たちが信仰している神々の名前だったことを思い出しました。ユリスナイの十二神と呼ばれる神々です。確か、カイタは武神、レートは商売と旅の守り神、キータライトは学問の神だったはず……。

リグトはユリスナイを見ました。それこそ、光の女神と同じ名を持つ女性です。どうということだろう？ と考えますが、声を出せないリグトには、質問することもできません。

すると、ユリスナイが少年に言いました。

「ねえ、きみ きみがどこから来たかはまだわからないんだけどね、それより先に、きみの名前を覚えてちょうだい。このままじゃ呼びにくくてしょうがないから」

「どうやって？ その子、しゃべれないんでしょう？」

とまた別の女性が言います。とても美しい顔と姿をしていて、長い緑の髪を綺麗に結い上げています。

「大丈夫よ。この子、こっちが言うことはちゃんとわかっているんだもの。まあ、見てて、スピア」

また神の名前です。ユリスナイ十二神の中の春の女神と同名でした。

ユリスナイがリグトの前に一冊の本を差し出しました。ページを開くと、細かい文字がびっしりと書き込まれています。リグトには読むことができませんでした。ユリスナイがうなずきます。

「やっぱり、あたしたちの文字も読めないみたいね。じゃあ、この手でいくしかないわ。いい？ これからあたしがいろいろな音を言っていくからね。きみの名前の音が出てきたら、うなずいてちょうだい。それをつなぎ合わせたら、きみの名前がわかるはずよ」

「ええ？ いろいろな音って 百五十一音全部言おうって言うのか、ユリスナイ？ もし彼の名前が長かったら、とんでもなく大変だぞ」

とキータライトという青年が驚きました。眼鏡の奥で目を見張っています。

ユリスナイはにっこりしました。

「そのくらい、なんてことないじゃない。とにかく、この子の名前を知らなくちゃ。まずはそこからよ」

そして、ユリスナイはリグトに向かって、ゆっくりと発音を始めました。初めてことはを習う子どもに教えるように、一つ一つの音をはつきりと言って、リグトの反応を確かめます。

キータライトが言っていたとおり、彼らが持つ音は、リグトが学校で習ったことばやその音より、ずっとたくさん種類がありました。それでも、ユリスナイは根気強く発音し、少年のうなずいた音を書き留めていき、とうとう、少年の名前は「リグト」だと突き止めてしまったのでした。

「リグトー！」

明るく呼ばれて、少年はすぐに草原の中から立ち上がりました。振り向くと、少し離れた場所からユリスナイが手を振っています。

「帰りましょう！ もつお昼だわ！」

リグトはすぐに籠を抱えて駆け戻りました。その中身をのぞいて、ユリスナイが笑います。

「あら、ずいぶんたくさん薬草を見つけたわね。偉いわ、リグト」

そう言うユリスナイ自身も、草原から摘んだ薬草の籠を抱えています。リグトの籠の中身より少なかったので、リグトはちょっと得意そうな顔になりました。

リグトがこの世界に飛ばされてきてから、すでに三ヶ月が過ぎました。相変わらずリグトは話すことができません。呪文が唱えられないので、魔法を使うこともできないのですが、魔法使いの目は使うことができました。今も、その力を使って広い草原から薬草を集めていたのです。

ふふ、とユリスナイが笑いました。

「うん、そうね。今日はあたしの負け。リグトは本当にいい目をしてるわ」

結局、ユリスナイたちはリグトがどこから来たのか突き止めることができませんでした。それでも、ユリスナイはリグトをずっと家に置いてくれたのです。話せないリグトは、ことば以外のもので自分の気持ちや考えを相手に伝えるしかありません。以前はあれほど淡々として無表情だったのに、今ではすっかり表情豊かな少年に変わっていました。特にユリスナイは、顔を見ただけで、リグトが何を考えているのかわかるまでになっていました。

ユリスナイが先に立って歩き出しました。相変わらず赤い髪を後ろ

で一つにお下げにして、丸い眼鏡をかけています。お洒落などまったくしないのですが、その顔は明るくてチャーミングです。今もにこにこ笑いながらリグトに話しかけてきます。

「この間完成したあの呪文の本、大評判ですつてよ。レートが教えてくれたの。世界中にどんどん知られているつて。あの本には本を写す呪文も載っているから、自分たちで本を増やすことができるのよね」

ユリスナイの仕事は、彼女自身が言っていたように、光の魔法を作り出すことでした。世界から魔法の力を引き出し、思い通りにコントロールして使うための呪文を見つけて、それを書き留めていくのです。それは未来の世界でリグトたち天空の民が使っている呪文そのものでした。確かに光の魔法は彼女が作ったものだったのです。

だから未来の世界では彼女が光の女神になつてるとんだ、とリグトは納得していました。天空の国に光の魔法をもたらした女性です。長い年月の間に神格化されて、神と崇められるようになったのです。

とはいえ、本当のユリスナイは、そんな神聖な雰囲気とは無縁でした。とてもおつちよこちよいだし、ものすごい忘れん坊です。今も彼女は歩きながらつまずいて転びかけました。籠を放り出しそうになつて、わつたつと！ とあわてて抱き直します。研究に夢中になつてしまつと、忘れ物やうっかりミスがしょっちゅうです。そのたびに、リグトはユリスナイの忘れたものを魔法使いの目で見つけ出し、やり忘れることがないように、そばにいて注意してあげます。口がきけなかつたつて、それくらいのことではできたのです。

ユリスナイがこんな人だったなんて、天空の民は誰も想像してなかったよなあ、と考えて、リグトは密かに笑いました。ユリスナイは本当に気取りません。とても庶民的で、身近で、そして、とても優しい人でした。素性もわからない、何一つ話すことができないリグトを、弟のようにかわいがってくれるのです。

リグトは子犬のようにユリスナイに体をすり寄せました。気持ちを

表すには態度で示すしかなかったのです。ユリスナイが驚いたように目を見張り、こら、甘えん坊！ と言って笑います。リグトも照れ笑いをしながら駆け出します。

すると、行く手の草原にシーラが立っていました。風に長い銀の髪をなびかせて、色違いの目でじっとこちらを見えています。リグトはとまどって立ち止まりました。占者の女性は、今まで見たこともないほど深刻な表情をしていました。

「どうしたの、シーラ？」  
とユリスナイが驚いて尋ねると、女性は言いました。

「今すぐここを離れなさい、ユリスナイ。ダイダと一緒に北へ逃げるの。 定めがあなたを捕まえるわ」

ユリスナイは眼鏡の奥で目を丸くしました。いぶかしい顔で占者を見返します。

「なんのこと？ どんな予感がしたのよ？」

「世界が裂けるわ」

とシーラは言い続けました。その声はまるでどこか遠い場所から響いてくるようです。

「闇のよどみから生まれた竜が世界を襲うの。人々は血で血を洗う戦いを始めるわ。海は荒れ狂い、山は噴火して、多くの命が失われる。北へ逃げなさい、ユリスナイ。ダイダと、その子連れて。北の最果ての地ならば、戦火もやっつてこないわ」

リグトは、はっとしました。占者が何のことを予言したのかわかったのです。リグトたちは学校で天空の国の歴史を習ってきています。その中で、この戦いのことも教わったのです。

闇のよどみから生まれた竜というのは、デビルドラゴンのことに違

いありません。世界中を破壊し、人々を全滅させることだけを喜びにする、悪の権化です。リグトの時代にはもう世界の最果てに幽閉されていますが、この時代ではまだ世界に実在しているのでした。

デビルドラゴンと人々の戦いは、世界の歴史の中で二度起こっています。時代と照らし合わせて、最初の戦いの方だ、とリグトは気がつきました。闇の竜は多くの人々の心に取り憑き、人と人同士を対立させ、世界戦争を引き起こしたのです。

けれども、リグトはどうしてもそれをユリスナイたちに伝えることができませんでした。リグトは文字も書けません。ユリスナイたちの文字を読むことはできるようになったのに、書こうとすると、まったく手が動かなくなってしまうのです。それはちょうど、リグトが何も話せないのと同じことでした。未来を彼らに告げることを、何かがリグトに禁じているようです……。

ユリスナイは真剣な顔で考え込んでいました。

「戦いが始まるの？ でも、どうして。今までだって、村同士の小競り合いくらいはあったけど、いつも話し合いで解決してきたでしょう？ いくらシーラの占いだからって、そんなものすごいこと」

すると、そこへ数人の男たちがやってきました。ダイダと弟のカイタ、それに行商人姿のレートです。おおい、と手を振りながら、血相を変えて走ってきます。

「ユリスナイ！ レートがとんでもない話を聞いてきたぞ！」

とダイダが言いました。レートがそれを引き継ぎます。

「戦が始まった！ ユガナムの人々とアダモラスの人々が争いを始めたんだ。お互いに相手の土地を自分のものだと言い張っている。いや、これは昔からの争いなんだが 連中は君が見つけた呪文を使って戦いを始めたんだよ！ 信じられないほど激しい戦いになっていく！」

ユリスナイは真っ青になって立ちすくみました。思わず取り落とし

た籠の中から、ばらばらと葉草がこぼれ落ちます。

「……嘘……」

とユリスナイは言いました。

「そんなことつて……。あれは光の魔法よ。そんな悪い目的に使うなんてことは……」

「魔法自体は聖なるものでも、使う人間はそうではないわ」

とシーラが言いました。相変わらず別の場所から聞こえてくるような、敵かな声です。

「闇の心を持つ者が使えば、光の魔法も闇魔法になる。人の命だつて奪っていくわ……。逃げなさい、ユリスナイ。ここももう安全ではないわ」

ユリスナイは激しく首を振りしました。

「だめよ！ あたしが見つけた魔法だもの！ なんとか止めなくちゃ！」

「みんなが君の家に集まってきている！ どうしたらいいか話し合おう！」

とダイダが言い、ユリスナイと一緒に先頭に立って駆け出しました。ユリスナイの家に向かって、全員で走っていきます。

後に一人残ったシーラは、長い銀の髪を風に流しながらそれを見送りました。青と金の色違いの瞳を悲しく細めます。

「定めがあなたに追いつくのに……ユリスナイ」

けれども、風の中に放った占者のつぶやきは、誰の耳にも届くことはありませんでした。

ユリスナイの家に十数人の人々が集まっていました。若者が多いのですが、中には壮年の男や老人も混じっています。皆が硬い表情でうつむいています。

「だめだ。どうしても戦火を食い止めることができない……」

とダイダが悔しそうに言いました。弟のカイタが激しく足を踏みならしめます。

「一カ所や二カ所なら止めようもあるんだ！ だが、戦いは信じられない早さで世界中に広がっている！ 今じゃ大陸中至るところが戦場だ！ 信じられん！」

「闇の竜が関わっているからよ」

と占い師のシーラが静かに言いました。長い銀の髪は、家の中でも鮮やかに輝いています。

「世界中に憎しみと恨みと妬みの想いを広げているわ。それは、もともと人が心に抱えていた闇よ。勝てるはずがないわ」

「でも、なんとかしなくちゃ！ 世界中が魔法で全滅してしまうもの！」

とユリスナイが叫びました。魔法戦争が始まってすでに二ヶ月。その間、戦いは驚くほどの早さで世界各地に飛び火して新たな争いを起こし、世界中を巻き込む大戦争に拡大していったのです。

ユリスナイは泣いていました。バラ色だった頬は青ざめ、ふっくらした笑顔は痩せてやつれてしまっています。丸い眼鏡と大きな目は相変わらずですが、青白い顔の中、瞳の暗さが際だって見えます。

すると、キータライトが言いました。

「世界中から魔法の呪文書を消滅させることには成功した。これ以上、世界に呪文書が広がることはなくなつたよ。でも、一度人々が覚えた魔法まで消し去ることはできない。やっぱり魔法戦争は続くんだよ」  
一同は黙り込みました。無力感が彼らをおおいます。彼ら自身、決

して無能な魔法使いではありませんが、世界中で繰り広げられる大戦  
争相手には、本当に、なすすべがないのでした。

「これからどうなるんじゃろうな？」

仲間の中で一番年かさの老人が口を開きました。杖を持った牧童の  
格好をしています。ケルキーという名前で、それは、ユリスナイ十二  
神の中の、豊饒と牧畜の神と同名でした。

「わしはもうこの歳じゃ。世界がどうなるうとも、わし自身は老い先  
短いから、見るものも少ない。だが、おまえさんたちはこれからの人  
間だ。世界がこれで終わってしまうんでは、あまりに悲しすぎるから  
な」

「そんなこと、させるもんですか！」

とユリスナイがまた言いました。涙をぬぐいながら、隣にいたリグ  
トを抱き寄せます。

「この世界には、あたしたちよりもっと若いこの子たちがいるのよ！  
この子たちのためにも、世界の破滅なんてこと、させるわけにはい  
かないのよ！」

「だが、どうやって？」

とダイダが重く尋ね、一同はまたことばを失ってしまいました。

遠くから振動が伝わってきます。魔法の波動です。空を震わせ、大  
地を地震のように揺らしています。

リグトの魔法使いの耳には、信じられないほどたくさんの人々の悲  
鳴と泣き声が聞こえていました。苦痛の声、断末魔の叫び声もひつき  
りなしに届きます。リグトはユリスナイの腕の中で泣いていました。  
伝わってくる嘆きが大きすぎて、押しつぶされてしまいそうです。

シーラがまた言いました。

「間もなく、世界は引き裂かれるわ……。巨大な魔法と魔法が激突し

て暴走を始めるの。始まってしまったら、それを止めることはもう誰  
にもできなくなるわ。魔法が世界中をずたずたにして、数え切れない  
ほどの命を奪っていく。その運命の歯車の力はまだにも強力で、誰  
にも止めることはできないわ。この場所も海の底に沈んでしまっ  
しょう……」

恐ろしい予言を告げる占者の声は、とても静かでした。本当に、こ  
の世ではない場所から聞こえてくるようです。仲間たちが立ちすくみ  
ます。

とたんに、リグトは、きつと顔を上げました。世界中から聞こえて  
くる悲鳴を心の中で払いのけ、魔法使いの耳を遮断して、いきなりそ  
の場にかがみ込みます。声は出てきません。その分の想いすべてを込  
めて、右手でばん、と床を強くたたいて見せます。ユリスナイたちの  
家の床に床板はありません。リグトの手は、むき出しの地面を直接た  
いた形になります。

「リグト？」

驚いたような顔をするユリスナイを、リグトはまっすぐ見つめまし  
た。たたきつけた右手を上にも動かして見せます。何かを持ち上げるよ  
うに。

「何が言いたいんだ、リグト？」

とダイダが目丸くすると、シーラがまた言いました。

「彼は　この場所を空に飛ばせ、と言っているのよ。世界が魔法に  
引き裂かれてしまう前に、この場所を安全な空に移動させろ、と。私  
の占いに出てきた通りよ。ただ、あまりに突飛な方法だったから、私  
自身が信じ切れなくて、言わずにいたの……。でも、彼もそれをしろ、  
と言っのね」

占者の女性は、青と金の色違いの瞳に薄く涙を浮かべて笑いました。

「そんなことできるの？」

とユリスナイは別の人物を見ました。灰色の服を着た壮年の男です。名前はヒールドム。ユリスナイ十二神の、大地の神の名前です……。「理論上は可能だな。ここはクレラ山が昔噴火したときにできた、火山性の岩盤の上の土地だ。この地下にはまだ火山のエネルギーが蓄えられている。一人二人の魔力では無理だが、大勢が力を合わせて働きかければ、地下のエネルギーを爆発させて、その力でこの土地を空に飛ばすことができる。そのまま空に定着させて風に乗せれば、この土地は空飛ぶ国に変わるだろう」

「空飛ぶ国」

と一同は声を失いました。信じられないように互いの顔を見合わせます。その中で、一人だけ、少しも迷いのない顔をしていたのはリグトでした。瞳を強く輝かせながら、もう一度地面を強くたたき、持ち上げるしぐさをして見せます。

「そっか……とユリスナイが言いました。」

「あなたにはわかるのね、リグト。あたしたちの未来が。生き残るために、あたしたちはこの場所を空に飛ばさなくちゃならないんだわ。みんなで力を合わせて……たとえ……たとえ、世界中の他の人たちを見殺しにすることになっても……」

声が震えました。うつぶいてまた泣き出したユリスナイの肩をダイダが抱きます。

「決断しよう、ユリスナイ。とにかく、助けられるだけ助けるんだ。世界中に呼びかけよう。俺たちを信じてくれる者は、この場所に集まれ、つてな。そして、この場所を空飛ぶ国に変えよう」

リグトはユリスナイを見上げました。大丈夫だよ、と言ってあげたいと思います。天空の国は無事に空に舞い上がる。そして、世界中を助ける正義の国に変わるんだよ。やっぱリグトは声を出すことができます。ただ想いを瞳に込めて、じつと見つめます。ユリスナイが泣き笑いしながらリグトを抱きしめました。

「励ましてくれてるのね。昔と逆になっちゃったわね、リグト……。ええ。あなたがそれだけ信じているなら、あたしも信じるわ……。世界中の人々をこの場所へ。そして、この場所を空へ。空飛ぶ国。天空の国を作るのよ！」

おう、と仲間たちは声を上げると、人々に呼びかけるために家を飛び出していきました。

## 6

結局彼らを信じてクレラ山の麓に集まった人々は一万人程度でした。本当はもっと大勢を救いたかったのですが、広範囲に呼びかける余裕も、人々を説得する時間もありませんでした。

度重なる魔法の攻撃の影響で大地はひっきりなしに揺れ、地下深い場所では巨大なエネルギーがうねり続けていました。世界各地で次々と火山が爆発しています。海底火山の噴火や地震の影響で、津波が海岸地帯を洗い流していきます。

「もうこれ以上待つことはできないわ」

とユリスナイは仲間たちに言いました。二十名に少し欠ける人数ですが、光の魔法を身につけた魔法使いたちの中でも、特に魔力が強い人々です。その一人一人の顔を見回しながら、ユリスナイが言い続けます。

「ヒールドムが地下のエネルギーの場所まであたしたちを導いてくれる。あたしがエネルギーに火をつけたら、みんなはこの場所を空へ運んで。地上の変動の影響を受けない高さまで、一気に運ぶのよ」

それを引き継いで、キータライトが言いました。

「この場所の質量は相当なものだ。最初は爆発のエネルギーで飛んでいても、それを目的の高さまで運ぶのは容易なことじゃない。全員で力と気持ちを合わせなかったら、絶対に成功しない。そこだけはしっかり覚悟しておいてくれ」

女性のように優しい顔立ちの学者は、そんなふうになを押ししました。

そこは草原の真ん中でした。集まっているのはユリスナイとその仲間たちだけで、他の人々はもっと安全な場所に避難していました。大地を持ち上げて空に運ぶなど、誰もやったことはないのです。どういふ事態になるのか、誰にも想像が付きませんでした。

ユリスナイがかたわらのリグトを見て苦笑しました。

「本当はあなたにも避難してほしいんだけどね」

少年は即座に首を振りました。絶対に嫌だ、ここに一緒にいる！と表情で伝えます。子どものリグトは、大地を飛ばす魔法に加わることでできません。もとより、魔法が使えなくなっているのですから、参加しても力にはなれないのです。それでも、リグトは彼らと別の場所に行くつもりはありませんでした。

「いさせてやれよ、ユリスナイ」

とダイダが言いました。

「これが俺だって、やっぱり絶対一緒にいたいと思うぞ。リグトは俺たちの仲間だ。心は一緒なんだよ」

ダイダ、ありがとう、とリグトはまなざしだけで伝えました。青年が、にやっと笑って片目をつぶります。

ひととき大きな地震が彼らを襲いました。立っていられなくなって、全員がその場に倒れます。クレラ山が不気味な音を立て始めていました。火口から薄い煙が立ち上るのが見えます。

「急げ！ このままだとクレラ山が爆発するぞ！」

とヒールドムがなりました。ユリスナイが叫びます。

「みんな、手をつないで輪を作って！ 全員の魔法を一つにするのよ！ 急いで！」

言いながら跳ね起き、近くにいた仲間たちと手をつなぎあっています。たちまち十数人が一つの大きな輪になりました。全員が一人の人物を見つめます。赤い髪をお下げにした眼鏡の女性です。

ユリスナイはうなずいて声を上げました。

「セバトオーチノコヨラカチノチイーダ！」

すぐに仲間たちがそれに唱和します。

「セバトヨチイーダ セバト！！！」

リグトは彼らを見つめ続けました。足下でまた激しく地面が揺れ、それがたちまち大きくなっていきま

した。地面の奥深い場所で大地が崩れる音が響き、クレラ山が激しく揺れます。山頂がもうもつと黒煙を噴き上げ始めます。

魔法使いたちは手をつなぎ合い、呪文を通じて心をついにしました。広大な大地を地表から切り離そうとします。空も森も草原も激しく揺れます。耳をふさぐような音がすぐ足下から響きます。今にも足下が崩れそうです。

「こらえろ！」

とダイダが叫びました。

「倒れるな！ 踏ん張れ！」

大揺れの地面は、立っているのですえやつとです。手が外れてしまわないように、必死で隣の手を握りしめ、魔法を支え続けます。誰の手もつかないなかつたリグトは、また地面に倒れました。草原の中に四つん這いになりながら、彼らの様子を見守り続けます。

シーラが叫びました。

「大丈夫！ 大地は空へ飛ぶわ！ 信じて 空へ！」

その時、また、ばきばきと崩れる音が足下から響きました。地面が

陥没して、数人が危うく呑み込まれそうになります。その拍子に彼らの手と手が離れ、一同は倒れました。

「早く！」

とユリスナイが声を上げました。

「手をつないで！ 大地を支えるのよ！」

思わず逃げ腰になっていた仲間たちが、はつとした顔になって起き上がりました。あわててまた手をつなぎ合います。

ところが、その中に手をつなごうとしない者たちがいました。地面に倒れたまま、恐怖の表情で茫然としています。

仲間たちは手を伸ばしました。

「何してるんだ！？」

「早く手を！」

二人は我に返って戻ってきました。けれども、一人だけは戻りません。恐怖に引きつった顔で、陥没した地面を眺め続けます。

「だ……だめだ！」

と男はどなりました。

「こんなことをしたって無駄なんだ！ 大地が空に飛び上がったりするもんか！ 俺たちはみんな、ここで死ぬんだ！」

「サドラ！」

とダイダが呼びました。ユリスナイも悲鳴のように言います。

「戻って、サドラ！ 地下で火山のエネルギーが爆発するわ！ 支えていないと、大地が崩れる！」

サドラと呼ばれた男は首を振りました。恐怖に目を見開いた顔は真つ青です。手を伸ばし、必死で名を呼ぶ仲間たちにまたどなります。

「い いやだ！ 俺は死にたくない！ こんなところで死にたくないかない！！！」

あっ、とリグトは心で叫びました。サドラは仲間たちに背を向ける

と、一目散に逃げ出したのです。卑怯者！ と追いかけて、しがみついて連れ戻そうとします。そんなリグトをサドラが振り飛ばし、また先へ逃げます。

リグトは逃げていく男をにらみつけました。裏切り者！ と心でののしります。魔法が使えたら彼の上に稲妻を落として罰を下してやりたい、と考えますが、リグトはやっぱり呪文が言えません。

残された輪の一端で、ダイダが必死で手を伸ばしていました。

「カイト！ カイト！」

サドラが抜けた痕を埋めてまた輪をつなごうとしているのです。カイトも大きな手を精一杯に伸ばしています。あとわずかというところで、どうしても手が届きません。地面は大揺れに揺れ続けています。

草原に地割れが走り、草と土が割れ目に呑み込まれていきます。

「大地が砕ける！」

とヒールドムが叫びました。

「魔法が暴走するわ！」

とユリスナイも悲鳴を上げます。切れた魔法の輪から、巨大な魔法の力があふれ出そうとしました。コントロールを失って、クレラ山とその周辺に襲いかかろうとします。ダイダとカイトは死にものぐるいで手を伸ばし合いました。あと十数センチというところで、二つの手がつながりません。

その時、ほっそりとした一組の手が飛び込んできました。二人の青年の大きな手を、右手と左手でしっかりと握りしめます。

とたんに、魔法の輪がまた完成しました。魔法エネルギーが暴走をやめ、再び一つの目的に働き始めます。地割れが止まり、揺れが一カ所におさまっていきます。

ユリスナイやダイダたちは目を見張って手の主を見ていました。

リグトです。

少年は右手にカイタ、左手にダイダの手を握りしめ、歯を食いしばって輪の中に一緒にいました。少年の体の中を通り抜けていく魔法エネルギーギーが、青白い火花になって少年のまわりで散っています。

「だ、大丈夫なの、リグト……？」

驚くユリスナイに、少年は、にやつと大人のように笑って見せました。魔法のエネルギーギーはまるで電撃のように激しく体を駆け抜けていきます。痛みさえ感じますが、それでも耐えられないことはなかったのです。呪文を唱えることはできなくても、魔法の力そのものは、リグトの体の中に存在していました。手をつなぎ合うことで、その力が輪の中に解放されていきます。

「たまげた。大した魔力じゃないか、リグト」

と隣で手をつないでいたカイタが感心しました。少年が、またにやりとします。

ユリスナイはうなずきました。全員の魔法の力を受けとりながら、声高く呪文を唱えます。

「ベト エラーン！」

岩の碎ける音を立てて、大地が地表から浮き上がりました。轟音の響き渡る中、空へ舞い上がっていきます。

とたんに、リグトの背後で悲鳴が上がりました。振り向くと、逃げ出していたサドラが、飛び立った大地の外れから足を踏み外して地上へ落ちていくところでした。あつという間にその姿が見えなくなっていました。大地はもう地上数百メートルの高さまで浮かび上がっていました。

「馬鹿野郎……」

つぶやきと共に、リグトの左手がぎゅっと握りしめられました。言ったのはダイダです。歯を食いしばって足下をにらみつけています。サ

ドラはダイダの親友だったので……。

クレタ山を中心に、大地はさらに高く浮き上がっていききました。その下で地上が割れ、不気味な紅い光が地表を走り、炎のカーテンが吹き上がってきます。大噴火と大地震が、いつせいに世界を襲います。ついに魔法の大暴走が始まったのです。世界が引き裂かれ、海が荒れ狂い、轟音が響き渡ります。無数の命が悲鳴と共に呑み込まれていきます。

地上の地獄絵を後に、大地は空へと舞い上がり続けました。

## 7

「調整完了。天空の国を常時バリアで包むようにしたからね。空高い場所を飛び続けても、薄い空気や寒さに悩まされることはもうないよ」

とキータライトが言いました。その隣でヒールドムも言います。「天空の国が乗っている岩盤は非常に堅いものだ。何千年空を飛び続けたって崩れるようなことはないから、その点は心配ない」

報告を聞いて、ユリスナイはうなずきました。そこはクレラ山の山頂に建つ石造りの建物の一室でした。彼らはそこを「城」と呼び、天空の国の整備拠点にしていました。天空城の始まりです。

城の最高責任者はユリスナイでした。仲間たちが空飛ぶ国のあちこちから持ち帰る情報や報告をすべて聞き、判断していきます。

牧童の老人ケルキーがユリスナイに言いました。

「気温が安定したから、これでやっと作付けができるぞ。天空の国に

避難してきた連中と畑を作りたいんじゃないが、かまわんか？」

ユリスナイはにっこりしました。

「もちろんいいわ。何か必要なものはある？」

「許可じゃな。一緒に働く連中に、わしが畑作りの魔法を教えることを許可してくれ。そうすりゃ道具も何もいらんからな」

ユリスナイはまたほえみしました。優しい笑顔ですが、同時に深い悲しみが揺れます。

「気をつけてね……。魔法に足をすくわれてしまわないように」

「なあに。地面を耕して、ちいと作物を元気にするだけの魔法じゃ。使い方さえ誤らなければ、怖いことなぞありゃせんよ」

と老人が安心させるように笑い返します。

「心配性だな、天空王様は」

とダイダも笑いました。天空王というのは、ユリスナイのことです。彼らは冗談半分のように、自分たちのリーダーをそう呼んでいるのでした。

ユリスナイは顔を赤らめると、ダイダに向かってあかんべをしました。そんなふうになると、彼女の顔をおおっている深い悲しみが束の間消えて、昔の明るく屈託ない表情が戻ってきます。

そこへ、白い服を着た男が入ってきました。緊張した声で言います。

「ユリスナイ！ 第五避難所の連中が暴動を始めたぞ！」

城の一室にいた全員は驚きました。

「暴動？ 何故！？」

「地上に戻してくれと言っている。風が吹いたら空から振り落とされる、地面が揺れたら墜落する、と言って不安がっているんだ」

そう話しているのは、ソエコトという医者です。ユリスナイ十二神の医者と同じ名でした……。

「馬鹿な。天空の国では空を飛んでいることなんて少しも感じないは

ずだぞ。ちゃんと魔法で安定させているんだからな」

とキータライトがむっとしたように言います。ソエコトが肩をすくめました。

「彼らは空を飛び続けている事実には耐えられないんだよ。緊張と不安で、みんな精神的におかしくなってきたら……。どうする、ユリスナイ？」

赤いお下げ髪に丸い眼鏡の女性は、少しの間考え込み、やがて静かに言いました。

「彼らの記憶を消しましょう。ここが地上から飛び立った天空の国だという事実を……。地上につながった場所だと思わせておくの。そうすれば、彼らが不安がることもなくなるわ」

「だが、国を歩き回れば、すぐに気がつくはずだぞ？ 二日もあれば一周できてしまう程度の大きさなんだからな」とカイトが言います。

「それも魔法をかけるの……。ここがどこなのか、この場所の外がどうなっているか疑問に思わずに、この中だけで暮らしていける魔法を。もちろん、その魔法を振り切って真実に気がつく人も出てくると思うわ。でも、そのくらい強い力を持つ人なら、ここが空飛ぶ天空の国だという事実には耐えられるでしょう」

なるほど、とソエコトはうなずき、すぐにまた出て行きました。彼は人の体と心の医者です。そういう魔法は彼の管轄でした。

報告は毎日山のように押し寄せてきました。ユリスナイは仲間たちと一緒に、それらを一つ一つ処理していききました。天空の国に人々が住む村ができ、町ができ、町や村をつなぎ合う道ができていきます。道を人や馬が行き交うようになりまます。そんなふうの一つの国ができあがっていく様子を、彼らは山頂の天空城から、つぶさに眺めています……。

天空の国が空に飛び立って一年がたつ頃、ユリスナイとリグトとダイダはクレラ山を下りて、麓の草原に行きました。草原の中にユリスナイの小さな家がまだぼつんと建っています。それを見て、若い天空王は淋しく笑いました。

「なんだかすごく久しぶり……。つい一年前まであそこで暮らしていたのに、なんだか大昔の夢だったような気がするわ」

ダイダが首をかしげて彼女を見ました。

「働き過ぎだぞ、ユリスナイ。いい加減、少し休まないと」

リグトもそれにならずきました。ユリスナイは天空の国を作り上げるのに必死で、ろくに眠ることもせず働き続けているのです。いくら若いといっても、このままじゃ倒れてしまう、と少年も心配していたのです。

「天空の国が落ち着いたらね」

とユリスナイは答えました。なんだかひとりのような口調です。

「みんなが幸せになったら。みんなが 天空の国の人々も、地上に残された人々も、みんなが幸せになれたら」

深い悲しみがユリスナイの顔をよぎりました。そのままうつむいてしまいます。

ダイダは大きな溜息をつきました。ユリスナイの細い体にいきなり手をかけると、両腕で抱き上げてしまいます。ユリスナイは驚き、悲鳴を上げました。

「な 何するのよ、ダイダ!?」

「少し眠ると約束しろ。そうしたら下ろしてやる」

「ね、眠るって、そんな暇ないわよ！ やることは山積みだし！ 今だって、こんなところでこんなこと ダイダが用があるって言うか

ら来たのよ！ 早く城に戻らなくちゃいけないのに」

「レムーネ」

とダイダが言いました。眠りの呪文です。ぱたりとユリスナイの声はやみ、抵抗していた体が力を失いました。赤いお下げ髪の手をダイダの胸に寄せて眠り始めてしまいます。

目を丸くするリグトに、ダイダが顔をしかめて見せました。

「目の毒ならあっちに行ってる。こうでもしないと、こいつは寝ようとしなからな」

リグトは肩をすくめ返しました。そのしぐさで、確かにね、という返事を伝えます。

ダイダは腕の中のユリスナイを見て、また溜息をつきました。

「責任を感じすぎだぞ、まったく……。いくら自分が作った魔法だからって、それを悪用したのは他の連中なんだ。世界がこうなったのは、おまえのせいなんかじゃないっていうのに」

リグトは大きくうなずきました。ダイダに抱かれて眠るユリスナイを、悲しく見上げてしまいます。

そんなリグトにダイダはいいました。

「家に行ってベッドを整えてくれ。今夜くらい、こいつをぐっすり眠らせてやるう」

リグトはまたうなずくと、草原の中の家に向かって走っていききました。その後から、ユリスナイを抱いたダイダがゆっくりと歩いていきます。その後から、ユリスナイを抱いたダイダがゆっくりと歩いていきます。

もう夕暮れ時です。薄赤く染まった青空で、かすかに一番星が光り出していました。

ある日、天空城へキータライトがやって来ました。眼鏡をかけた優しい顔が、いつになく嬉しそうに輝いていたので、ユリスナイは目を丸くしました。

「いいことでもあったの？ いやにご機嫌じゃない」

「やっと念願のものが作れたのさ！ そら、これだ！」

とキータライトが前に引き出したのは、一匹の犬でした。綺麗な長い茶色の毛並みに銀毛が混じっています。ユリスナイはとまどいました。

「犬を作ったの？ ……でも、これ、ケルキーのところの牧羊犬でしょう？」

「左様です、天空王様」

そう答えたのはキータライトではなく、茶色の毛並みの犬でした。

人間の男の声で話しています。驚くユリスナイたちに、キータライトはにやにやしながら言いました。

「そう、人のことばを話す、もの言う犬だよ。魔法で知性を伸ばしたんだ。ぼくたちを手伝ってくれる、頼もしいパートナーさ」

「素敵ね」

とユリスナイは言い、深々と頭を下げている犬にかがみ込みました。

「この国には助けを欲しがっている人たちが大勢いるわ。あたしたちと一緒に、その人たちを助けてあげてちょうだいね」

すると、犬は頭を上げ、賢そうな目でユリスナイを見ながら言いました。

「私はこの天空の国の人だけでなく、地上の世界の人々まで助けるこ

とができます、天空王様。その力をキータライト様が与えてくれました。ご覧ください」

次の瞬間、シユン、と鋭い風の音が響き、猛烈な風が巻き起こりました。窓のない城の部屋だったので一同が驚いていると、その目の前に巨大な生き物が舞い下りてきました。全長が十メートルもある大蛇のような姿をしています。よく見ると、その頭と前足は犬の形をしていました。全身幻のような白い色をしていて、霧のようなものが体の中を絶えず流れています。激しい風は、その生き物が巻き起こしているのです。

「風の犬、と名前をつけたよ。首に巻いている魔法の首輪で風の獣に変身できるんだ」

とキータライトが得意そうに言いました。

「これに乗れば、天空の国から地上に下りていくことができる。地上は今、魔法戦争の影響で荒れ果てているけれど、この犬は空中に留まることができるから、安全な場所から地上に魔法をかけることができるんだ。地上を癒しに行くことができるんだよ、ユリスナイ！」

「地上を癒す」

とユリスナイは繰り返しました。信じられないように見張った瞳が、みるみる明るくなっていきます。昔のように顔を輝かせて、彼女は聞き返しました。

「本当に、キータライト？ 本当に、あたしたちは地上を助けに行くことができるの！？」

学者の青年は眼鏡の奥で目を細めてうなずきました。

「風の犬は、これの他にも十頭いる。来月までにはあと七頭揃うよ。とりあえずそれだけいれば、みんなで行けるだろう」

ユリスナイは手をたたきました。その場に居合わせた他の仲間たちも歓声を上げます。

「行きましよう、みんな！ 地上を助けに！」

そう呼びかけるユリスナイの目には、嬉し涙が浮かんでいました。

ユリスナイたちが風の犬で天空の国から下りて地上を癒していく様子を、リグトは魔法使いの目でずっと眺め続けていました。

大陸は魔法の暴走で引き裂かれ、広い海に散りぢりになり、噴火や津波に襲われた痕を至るところに残していました。荒れ果てた大地が黒々と広がるばかりです。ところが、ユリスナイたちがそこに下りていくと、地表が緑におおわれ、花が咲き、木々が萌え出しました。血の色に染まった川が澄み、闇を呑み込んでどろりとした海が青い輝きを取り戻します。緑になった大地には命が戻り始めました。鳥が飛び獣が走り、そして、人々が姿を現し始めます。

ある日、ヒールドムが言いました。

「今日、面白い連中に会ったぞ。やたらと小さな人間なんだが、地面を掘るのが得意でな、俺が石の名前を教えてやったら大喜びするんだ。連中には鍛冶のやり方を教えてやろうと思うんだ。きつとうまいことやろぞ」

「私は森の中に隠れていた人たちを見つけたわよ」

と言ったのはスピアでした。

「戦火を免れた花や木を大切に守っていたわ。嬉しくてね、花の魔法を教えてきちゃったわ」

そう言うスピアの髪は、木々の梢のような緑色をしています。

キータライトは嬉しそうにこんなことを話しました。

「ぼくは、ぼくらによく似た人々を見つけたんだ。ぼくたちよりほんの少し背が低いくらいで、本当にぼくらによく似ているよ。まだ文字やことばを持っていなかったんだけれど、ちょっと教えただけで、すぐに覚えるんだ。人間だ、と言ったら、たちまちそれを自分たちの呼

び名にしたよ。とても頭がいい。これからも、彼らにはいろいろ教えてやろうと思うんだ」

彼らが地上に下りるたびに、地上はどんどん回復していきました。緑が広がり、命があふれ、そこに歌声と笑い声が湧き起こります。

ソルとキットの双子の兄弟が、叔父のボンカルと一緒に地上から戻ってきて言いました。

「地上に四季が戻ったよ。ぼくたちで季節を直してきた。これで地上でも農業ができるよ」

「ほい、わしの出番じゃな」

と張り切ったのは牧童のケルキーでした。

「地上の連中にも、畑の作り方や家畜の飼い方を教えてやろう。こんな老いばれでも役に立つとわかったからな。まだまだ若いもんには負けちゃおれんわい」

「そうやって作物がたくさん穫れるようになれば、今度は余分な収穫物の売り買いが始まる。そうになったら、今度はぼくの出番だね。彼らの商売のしかたを教えてあげよう」

と言ったのは行商人のレートでした。すでに天空の国の人々に教えて成功させているので、その声も自信に満ちています。

そんな彼らの話を聞きながら、そういうことが、トリグトは考えていました。

ユリスナイの仲間たちは、それぞれの得意分野で地上の人々を助けています。魔法戦争で傷つき、自分たちの国も文化も失っていた人々にとつて、それは神の使いか、神自身のように見えたことでしょう。それがやがて本当に神として崇められるようになり、地上にユリスナイの十二神が誕生したのです。

地質学に詳しいヒールドムは大地の神に、花や植物を愛するスピア

は春の女神に、人々に知恵を教えるキータライトは学問の神に、地上に四季を回復させたソルとキット、そしてボンカルは、それぞれ夏や秋、冬の神に。ケルキーは豊饒と牧畜の神、つまり農業の神に、レートは商売と旅の神に……。他の仲間たちがユリスナイ十二神の名前と一致していたのも、そういうわけだったのです。

さらに半年あまりが過ぎた頃、海を癒しに行っていたルクアという仲間が戻ってきて、ユリスナイたちに言いました。

「俺は天空の国を下りて海へ行くよ。海には戦火を逃れた連中がいて、魔法で自分たちの体を作り変えて、海の中で暮らしているんだ。その連中が、俺にぜひ王様になってくれって言うているんだよ。俺もその連中が大好きだ。彼らと一緒に暮らしたいんだよ」

それを聞いて、ユリスナイはほほえみました。

「あたしは天空王と呼ばれるけど、あなたは海の王様だから、海王になるのね。思うようにしていいわ、ルクア。空と海に別れ別れになってしまうけれど、あたしたちはずっと友だちよ。困ったときにはあたしたちを呼んで。いつでも、天空の国は海を助けに駆けつけるから」

「この世界に空と海がある限り、我々は友だちであり続ける。これは世界が続く限り守られる約束だな」

とルクアも笑い、手を振って海へと去っていききました。ルクアが消えていった海は、ひととき青く美しく輝きました。

リグトはそれを眺めて、彼が海王の始まりだったんだ、と考えました。ルクアというのは、ユリスナイ十二神の海の名前でもありません。海王になった青年は、人間の間では海の神と崇められるようになったのです。

仲間のセリヌという女性と結婚したのです。仲間たちは幸せな二人を盛大に祝い、リグトはまた、一人でうなずいていました。セリヌというのは、十二神の中の愛と結婚の女神で、本当に武神カイトの妻だと言われていたのです。

淡い金髪を結って花を飾った花嫁は、それは愛らしく美しく見えませんでした。それをとろけそうな目で眺めるカイトを、兄のダイダが冷やかします。

「まったく。おまえら、いつの間にかこういう関係になってたんだよ？

俺はてっきりおまえもユリスナイを好きだとばかり思っていたのに」

「ユリスナイには兄貴がいるからな」

とカイトは笑い、花嫁を抱き寄せて言いました。

「兄貴たちこそ、早くこうなれよ。いい加減まとまってもいい頃だと思っぞ」

弟から逆襲されてダイダは返事に詰まり、ユリスナイは真っ赤になりました。そんな二人を見て、仲間たちが口笛を吹いて冷やかします。

ほんとにダイダとユリスナイが結婚するといいのになあ、とリグトは考えました。

リグトにとつて、二人は兄や姉のような存在です。お互いに好き合っているのも、見ていればわかります。早く二人に結婚して幸せになってほしい、とリグトはずっと思っていました。

誰が幸福でも不幸でも、淡々としていて少しも感情を動かされなかった少年が、変われば変わるものでした。

彼ら自身の間でめでたいこともありました。ダイダの弟のカイトが、

事件は突然起きました。

天空城に知らせが飛び込んできたのです。

「大変だ、ユリスナイ！ シーラが……！」

占者のシーラは他の仲間と一緒に風の犬で地上に下りていました。大陸の一つが行くべき方向を占いで見極めるためだったのですが、その彼女が、血まみれになって天空城に運び込まれていました。

「シーラ！ シーラ！」

ユリスナイが真っ青になって女占者に飛びつき、ダイダは仲間たちに尋ねました。

「いったい何があつたんだ！？」

「それがよくわからないんだ。ぼくたちは大陸に散って、それぞれに回復の魔法を使っていたんだけど、突然シーラの悲鳴が聞こえて……。獣も敵も、何も見当たらなかつたのに」

シーラの着ている灰色の服は血に染まっています。リグトは青ざめました。あまりにも出血の量が多いのです。早く助けなければ命に限りありません。

ところが、医者ソエコトが言いました。

「変だぞ。傷が魔法で治らない」

仲間たちはまた仰天しました。

「どういうこと？ ソエコトに治せないって」

「傷は魔法でふさがるんだ。なのに、またすぐに傷が広がって、出血が始まってしまふ。こんなことは初めてだ」

とまどうソエコトの話に、リグトは、はっとしました。魔法で癒してもすぐまた悪化していく怪我。それは闇の毒が作る傷です。怪我を負った者の体内で毒を増やして、その者を死に追いやっていくのです。

すると、シーラが目覚まして呼びました。

「ユリスナイ」

天空王の女性はすぐにかがみ込みました。

「何、シーラ！？ 何があつたっていうの……！」

すると、占者は微笑しました。青と金の色違いの瞳が細められて、ユリスナイを見上げます。

「私はね……占いから罰を受けたのよ……。とても大事なことを占いで見つけていたのに、それをみんなに教えなかつたから……」

「とても大事なこと？ 何、それは？」

とユリスナイは尋ねましたが、シーラはそれには答えませんでした。

「ねえ、ユリスナイ……」

と代わりに話し出します。

「あなたは本当によく働いてきたわ……。もう、自分の幸せを見つけていい時よ。天空王を他の人に譲りなさい。そして、ダイダと結婚するの……。子どもも生んで……。子どもはかわいいわ。私が言うんだから、間違いないわよ……」

シーラには今年四つになる娘がいました。母親によく似た銀の髪をしています。

シーラ？ とユリスナイはまた尋ねました。目の前で、女占者はどんどん弱っていきます。その状態で何故こんなことを話すのか、ユリスナイには理解できませんでした。他の仲間たちも同様です。

すると、一同を見回して、シーラはまたほほえみました。

「ねえ……私のあの子をお願いね……。あの子自身に占いの力はないけれど、私の占者の血は、あの子の中に引き継がれている……。遠い未来、私の力を受け継いだ占者が、またこの世界に生まれてくるわ。その占者は世界に迫る危機を見抜いて、世界を救う力の一つになるのよ。私がここでそうしたみたいに……。だから、ねえ、みんな……あ

の子をよろしくね……」

シーラの顔は相変わらず美しく整っていましたが、血の気が失せて、透き通るような顔色になっていました。輝く銀髪は血に染まっています。

シーラ！ シーラ！ とユリスナイは女占者の手を握りしめて叫びました。

「死んじやだめよ、シーラ！ ねえ、あなたが見つけた占いつてなんだったの！？ あなたをこんな目に遭わせたのは何 ！？」

けれども、やっぱり占者は何も話しませんでした。ほほえむ目のまま若い天空王を眺め、長い息を吐くと、そのまま力を失っていきましました。

彼女の体の下には大量の血が流れていました。どれほどソエコトが魔法で傷をふさごうとしても、どうしても癒すことができなかったのです。ユリスナイと仲間たちが声を上げて泣き出しました。女占者はもう二度と目を開けません。

リグトは愕然と立ちすくみました。シーラの命を奪った闇の毒。それは誰のしわざなんだろう、と考えます。

天空の国の下に広がる地上に、得体の知れない闇の気配がしてしましました……。

その日を境に、地上で次々と不穏な動きが起き始めました。

せつかく緑に戻った場所を嵐が襲って、木々が残らず倒され、そこに住むものたちが住みかを失いました。大きな地震や噴火が各地で起こり、多くの命をまた奪いました。天候もまた不安定になり、せつかく植え付けた作物が全滅します。

ユリスナイたちは全力で地上の異常を防ごうとしました。ところが、それらの出来事は、どんなに強力な魔法を使っても好転させることが

できませんでした。被害はどんどん広がり、家を失い、食べるものもなくなつた者同士が、各地で争いを始めました。魔法を使える者も大勢残っていたので、また魔法戦争が始まりそんな気配さえしていました。

「何事なの……？」

とユリスナイは言いました。他の仲間たちも青ざめて地上の様子を眺めるばかりです。

「順調に回復していたはずよ……？ それなのに、どうしてこうなっていくの？ どうして……？」

けれども、いつもそんな疑問に答えてくれた女占者は、もういません。ユリスナイと仲間たちは、驚き、とまどうばかりでした。

やがて、ユリスナイは地上に下りることをやめました。地上を他の仲間たちに任せて城の一室にこもり、調べ物を始めたのです。それは、昔、光の呪文を作り出そうとしていた頃の様子に似ていました。食事も寝ることも忘れて本を読み、紙に大量の文字を書き付け、ひたすら考え続けます。そんな彼女をリグトはやきもきしながら見ていましたが、リグトや仲間たちがどれほど言っても、ユリスナイは研究をやめようとはしませんでした。

そして、ある晩遅く、ユリスナイは突然声を上げました。  
「そう ！ やっぱりそうだったのね、シーラ！」

リグトはまだ寝ていませんでした。声に驚いて駆けつけると、ユリスナイは机に向かつて座ったまま、蒼白な顔でじっと机の上を見ていました。いったい何が？ とリグトは彼女の視線を追いましたが、机の上には何も載ってはいませんでした。

ユリスナイは、黙ったまま何かを見ていました。そこにはない、遠い場所の何かです。堅くこわばった横顔は、石の彫刻のようです。リグトは突然不安になって、ユリスナイにしがみつきました。必死で彼

女を揺すぶります。

すると、ユリスナイが我に返ったようにリグトを見ました。丸い眼鏡の奥で、大きな瞳がリグトの姿を映します。その瞳のさらに奥に、迷いと深い苦悩があるように、リグトには感じられました。いつそう不安になってしまつて、また彼女にしがみつこうとします。

すると、そんなリグトの体が、ふわりと抱きしめられました。

リグトはびつくりしました。ユリスナイが彼に腕を回してきたのです。昔のように柔らかくリグトを撫でながら、ユリスナイは言いました。

「大丈夫。大丈夫よ、リグト……。あたしがいるから……。あなたたちになんて、手出しはさせないから……。」

リグトは目を丸くしました。なんのことを言われているのか、全然意味がわかりません。ユリスナイの顔を見ると、彼女は静かにほほえんでいました。優しい優しい笑顔です。迷いや苦悩はもう見えません。

「ねえ、リグト　あたしちょっと、ダイダの所へ行つてくるわね」と言われて、リグトはまたとまどいました。もう真夜中です。こんな時間に彼女がダイダを訪ねたことはなかったのに。

すると、彼女はまた笑いました。ほんの少し恥ずかしそうに、こう言います。

「どうしてもダイダに会いたいのよ……。今すぐに。明日じゃだめなのよ。先に寝ていてね、リグト。」

そして、ユリスナイは出かけていきました。白い布をマントのように絡めた姿が、城の外の闇に消えていきます。

その夜、リグトは眠れませんでした。風の音がするたびに、ユリスナイが帰ってきたのかと、はっとしましたが、とうとうその晩、彼女は城へは戻ってきませんでした。

翌朝、ユリスナイは仲間たち全員を天空城の一室に呼び集めました。サドラとシーラが死に、ルクアが海に去って、彼らは、少年のリグトを含めて十四名になっていました。そんな中で、ユリスナイは一人椅子に座り、全員の顔を見渡しました。

「地上で何が起きているかわかったのよ」とおもむろに切り出します。

その顔がまたひどく青ざめていることに、リグトは気がついていました。お下げに結った赤い髪も、眼鏡の奥の大きな瞳もいつもと同じです。なのに、彼女はなんだか急にとても歳をとってしまったように見えました。その場にいる仲間たちの誰よりも年上のような、不思議な静かさを漂わせています。

「それはなんだい!？」  
とキータライトが即座に尋ねました。

「地上の様子は本当におかしいぞ!　あれほど素直だった人間たちが、どんな変になっていくんだ!　ぼくが教えた知恵を戦うことに悪用し始めている!　まるで本当に　昔のぼくらの戦いを見ているみたいだ!」

すると、ユリスナイは青年をじつと見つめました。悲しい声で、こう言います。

「その通りなのよ、キータライト……。これは闇の竜のしわざなの。あたしたちの中で争いを巻き起こしたように、今度は地上の人々の間に、いさかいと戦いを引き起こそうとしているのよ。」

仲間たちは息を呑みました。馬鹿な!　とどなったのは方イタでした。

「あいつはもういなくなつたはずじゃなかつたのか!? 世界中をずたずたにして、それで満足して消えたんだとばかり……!」  
「いたのよ」

とユリスナイは静かに答えました。

「あれは世界の闇がよんで生まれてきた悪の権化。人が闇を心に持つ限り、そこから無尽蔵にエネルギーを得て、決して消えることはなかつたのよ。……確かに、闇の竜はこの世界を破壊して、それで満足して攻撃をやめたわ。でも、あたしたちが地上へ降りて世界の再建を始めたから、またそれを破壊しようと考え始めたのよ。あれが望むのは破壊と破滅、そして絶望。一度立ち上がり始めたところで、また打ちのめされれば、人々は今度こそ本当に絶望してしまうわ。すべての命が望みを失って、死に向かつてしまふ……。闇の竜は、それをしようとしているのよ」

ユリスナイの椅子のかたわらにはダイダがいました。ユリスナイが何を言つても、ひとことも口をはさみません。昨夜のうちに、すべてを彼女から聞かされていたのです。

「シーラが占いで見つけていたというのは、そのことかね!」  
と牧童のケルキーが声を上げました。

「何故、彼女はそんな大事なことを黙っていたんだ!?」  
とレートも言います。すでにいない人物を、つい責める口調になつてしまつています。

ユリスナイは悲しく仲間たちを眺めていました。

「彼女を恨まないで……。シーラには見えていたのよ。闇の竜を倒すための方法も。それをさせたくないばかりに、彼女は真実を自分の胸に納めていたの。そして……。彼女は闇の竜に殺されてしまつたのよ……」

仲間たちは、またはつと声を呑み、そうか　とりグトは思わず目

を閉じました。闇の竜、つまりデビルドラゴンは、自分の邪魔をするのが天空の国の魔法使たちだと承知していました。そこで、彼らに手出しをさせないために、彼らの目である占い師を真っ先に死に追いやつたのです。

「それならば、なおのこと　!　どうして彼女は何も言わずに逝つたんだ!?　彼女は、どんな方法を見つけていたつて言つんだ!?」

とキータライトが尋ね、他の仲間たちも口々に同じことを言います。ユリスナイはまた全員を見回しました。その顔が静かなほほえみを浮かべているのを見て、仲間たちは驚きました。いぶかしそうに、自分たちの王を見ます。

「その方法は、もうとつくにわかっていたの」

とユリスナイは言いました。ほほえみに負けないくらい、静かな声です。

「呪文の研究をしていてね、見つけてしまったの。あんまりものすごい魔法だったから、それだけは呪文書には載せなかつたわ。あたしの頭の中にだけ封印して、そのまま、あたし自身が忘れていたの。でも、それは時が巡つたときに再びこの世界に現れる約束だったのよ。闇の竜を倒すためにね。そういう定めだったの」

リグトは青ざめながらユリスナイの話を聞いていました。仲間たちはまだ意味がわからなくて、とまどつています。でも、リグトには、彼女が何を言っているのか、次第に理解できるようになつていたのでした。

闇の権化であるデビルドラゴンは、人の心に闇がある限り、決して消すことができない存在です。何度倒しても、何度でも復活してきて、またこの世界を生き地獄に変えようとします。

けれども、リグトたちの時代には、そんな竜を倒す方法が一つだけ知られていました。それは

「人を媒体にしてね、世界中の聖なる力を光に変えてこの世界に呼び込むのよ」

とユリスナイは仲間たちに話し続けていました。

「この世界には計り知れない聖なる力があるわ。それがすべて光になれば、さすがの闇の竜も存在していることはできなくなるの。闇は光には勝てないから。闇の竜を完全に消滅させることができるのよ。」

あたしは、その魔法の呪文を知っているの」

「光を呼ぶ魔法か……」

と仲間たちはつぶやきました。キータライトが眉をひそめます。

「だが、闇の竜の力は強大だぞ。それこそ、この世界すべての闇の象徴なんだから。それを完全に消滅させるとなると、光も信じられないくらい強力でなければならぬはずだ。そんなすさまじい光を、その呪文で呼べるっていうのかい？」

「ええ、呼べるわ。みんなにはちよつと無理だけどね」

と言ってユリスナイは笑いました。透き通った、優しい笑顔です。仲間たちは、なんとなく、どきりとしめました。いつそいぶかしく、彼女を見つめてしまいます。

キータライトがまた言いました。

「人は光と闇からできている。体も心も、両方とも。そんなすさまじい光を人を媒体にして呼んで、無事ですむものなのか？」

「すまないわね」

とユリスナイは答えました。本当に静かな口調です。

「強烈な光は、その人の中の闇も影も完全に焼き尽くしてしまうわ。そうしたら、後には光の部分しか残らない。その人はもう人間ではなくなってしまうの。消滅してしまうのよ」

仲間たちは完全に声を失いました。リグトは膝が震え出すのを感じていました。デビルドラゴンを消滅させるための唯一の方法。それを

やるうとしているのは、それは、その人は、。

「あたしが、やるわ。この体を光にして、世界から闇の竜を消滅させる。それが、魔法の呪文を見つけたときからの、あたしの定めだったのよ。シーラはそれに気がついていたの。だけど、シーラは優しいから、あたしにそんな真似させたくなくて、それでずっと黙っていたのよ」

ユリスナイのことばに、仲間たちは立ちすくみました。ダイダが顔をそらして、うつむきます。彼はすべてを聞かされているのです。すべてを承知の上で、彼女の隣に立っているのです。

ユリスナイがほえみしました。

「止めないでね、みんな。落ち着いてるように見えるかも知れないけど、ほんとはもうドキドキで、がくがくなんだもの。震えて立っていられなくて、それでこうやって座ってるの。でもね、誰かが闇の竜を倒しに行かなくちゃいけないのよ。そうしなかつたら、この世界は未来につながっていかないんだから」

「それなら、わしにやらせるんじゃない、ユリスナイ！」

とケルキーが突然どなりました。

「わしはもうこの歳じゃ！もう充分生きたし、いろいろなこともたっぷり見てきた！最後に光になって華々しく退場していくのも、おつなもんじゃ！」

ユリスナイは、またにつこりしました。

「だめよ、ケルキー。あなたはまだみんなに教えなくちゃ。畑作りのこと、牧畜のこと……。生きていくために、とても大事な技術よね。それに、光を呼ぶ魔法は、みんなの魔力では足りないの。とても強大な力が必要なのよ。あたしが持っているくらいなの」

仲間たちはまた何も言えなくなりました。首を振り、彼女に飛びついて止めようとします。

その時、城の外から雷鳴のような音が響き渡りました。

「何ヲシヨウトシテイル 魔法使い!? 貴様ヲノ下ヲ又企ミナド、  
実現サセルモノカ !?!?!」

窓の外に巨大な生き物の姿がありました。黒々と光るうろこ、赤く  
光る目、空を切る音をたてて羽ばたきを繰り返す、大きな四枚の翼

「闇の竜だ!!!」

と仲間たちは驚きました。闇の怪物は、天空城のすぐ上空に姿を現  
していたのでした。

ユリスナイが叫びました。

「あいつを抑えて! 手を出させないで!」

ガラガラと音を立てて城の一角が崩れました。一同が立っている部  
屋が大揺れに揺れ、天上が瓦礫になって降ってきます。ぼっかりと開  
いた穴の向こうに、巨大な竜の鎌首が見えていました。

「レマート!!!」

とカイトが竜に両手を突きつけました。他の仲間たちもいつせいに  
それになります。闇の竜の羽ばたきが空中で止まります。制止の魔  
法に抑え込まれたのです。

ユリスナイはうなずきました。ほほえんだままで一同を見直し、短  
く言います。

「じゃあ、ね」

唇が何か呪文を唱えましたが、それは誰の耳にも聞こえてきません  
でした。椅子に座った彼女の姿がたちまち銀の光に包まれ始めます。

リグトは飛び出しました。他の仲間たちは闇の竜を抑えるので手一  
杯ですが、リグトだけは自由だったのです。ユリスナイに飛びつき、  
引き止めようとします。

とたんにまたユリスナイの声が聞こえました。

「やっぱりよ! ダイダ、お願い!」

とたんにリグトの体が抑えつけられました。ダイダがリグトを捕ま  
えたのです。

「だめだ!」

とダイダがどなりました。真っ赤に染まったその顔は、大きく歪め  
られていました。まるで 今にも泣き出しそうに。

「ユリスナイに触るな! おまえまで消滅するぞ!」

リグトは激しく頭を振りました。死にもものぐるいでダイダを振り切  
ろうとしますが、青年はリグトをがちりつかんで放しません。リグ  
トはその手に思いきりかみつきました。ダイダが悲鳴を上げた隙に、  
手を払いのけてまた走ります。

目の前でユリスナイは銀色の輝きに変わっていました。吸い込まれ  
るように、その姿が消えていきます。

「ユリスナイ!!!」

リグトは叫んで彼女に飛びつきました。その瞬間、声が出たこ  
とに、自分では気がつきませんでした。

銀のきらめきは二人を包み、そのまま城の一室から消えていきまし  
た。

1 1

まばゆいきらめきの中にリグトは立っていました。

その手はユリスナイの服をしっかりと握りしめています。

そつしながら、小さな子どもが母親を引き止めるように、リグトは  
泣きじゃくっていました。

「行かないでよ、ユリスナイ　行かないで　ぼくらを置いていかないでよ」

光が本当にまぶしくて、ユリスナイの姿もあたりの景色も、とても見ていることができませぬ。それなのに、リグトには彼女が振り向いたことがわかりました。弱った顔でリグトを見てきます。

「困ったなあ……。だから、ダイダにしつかり捕まえておいて、つて頼んだのに」

リグトはまた激しく首を振りました。服をつかむ手に、いつそう力を込めます。

「行っちゃいやだよ！　ユリスナイがいなくなるなんて、絶対にいやだ！　ずっと、ぼくたちのそばにいてよ！」

「ぼくたちのそば？　ぼくのそばって言いたいんでしょ、本当は？」  
とユリスナイがからかうように言いました。リグトが思わず赤くなって顔を上げると、光の中に彼女の姿が見えました。ユリスナイはもう髪をお下げにはいませぬでした。長い髪が肩から背中へと流れています。眼鏡もかけてはいませぬ。その髪も顔も全身も、美しい銀色に輝いています。まるで光の女神その人のようです。

けれども、その口調だけは、以前のユリスナイのままでした。面白がるように、こう続けます。

「話せるようになったのね、リグト。嬉しいわ。リグトの声を聞くことができたし、リグトに名前を呼んでもらえた。最高ね」

ユリスナイ！　とリグトはまた叫びました。彼女の服を強く引っ張ります。

「戻ろうよ、ユリスナイ！　みんなが待つてるよ！　ダイダだって！　君は行っちゃだめなんだよ、ユリスナイ！」

すると、ふふつとユリスナイが笑いました。静かで優しい笑い声です。

「ダイダはわかってくれたわよ。……不承ぶしようだったけどね。これはね、どうしてもやらなくちゃいけないことなのよ。ここで闇の竜を倒さなかったら、地上だけでなく、いずれはあたしたちの天空の国まで闇の竜に蹂躪されるわ。みんな一人残らず殺されてしまつて、世界に命は一つも残らなくなるの。そんなの、だめよね。世界は続いていかなくちゃいけないんだもの。未来へ　リグトの時代へ、ね」

リグトは、はつとしました。思わず何も言えなくなりませぬ。

「そんな少年へ、ユリスナイはまたほほえみかけました。  
「今はもう、あたしにもちゃんとかわかつているのよ。リグト、あなたは未来の時代から来たのよね。あなたは、あたしたち天空の民の子孫。だから、あたしたちがここで全滅してしまつたら、あなたはこの世界に生まれてこなくなつてしまふのよ。それはね、絶対に嫌なの。自分が死んでしまふことより、もっと嫌。あなたたちは生きなくちゃいけないわ、リグト。そのために、あたしは光になるの。今のこの世界を、未来のあなたたちの時代につなぐために。この世界を、あなたたちに残してあげるために、ね」

だから、わかつてね、とユリスナイは言いました。小さな子どもに言い聞かせるような口調です。

リグトは泣き続けました。もう彼女の顔を見ていることはできませぬでした。うつむいて、ただその服の裾を握り続けます。

すると、ユリスナイが手を伸ばしてきました。リグトの髪をそつと優しく撫でてくれます。

「楽しかったわね、リグト。あなたが来てからの二年半、本当に毎日楽しかった」

ユリスナイ！　とリグトはまた必死で服をつかみ直しました。けれども、その手の中で、服は次第に銀の光に変わり始めていました。リグトの目の前でユリスナイの姿が薄れて、光そのものになっていきま

す。

「泣かないで、リグト」

とクリスナイは言いました。

「あたしは光の中で消えてしまっけれど、あたしの中の光の部分は残り続けて、世界を照らす光と一緒にいるわ。それはもう、人の姿ではないし、人の想いも持たないけれど、でも、あたしはずっとそこにいるの。光と共に、ずっとリグトのそばにいるのよ。あたしは世界中のすべての人のために行く。でもね、リグト　あたしは、あなたのためにも行くのよ」

そして、遠ざかる声は、最後にこう言いました。

「ダイダ！　リグトをお願い　！」

強い力が少年を後ろから捕まえました。あっという間にクリスナイからリグトを引き離します。

光の中で薄れながら、クリスナイが最後にはほえんだことに、リグトは気がつきました。輝く唇が動いて、聞こえない声でささやきかけてきます。

幸せにね。

クリスナイは、そう言っていました。

そして、銀の光は破裂しました。光は爆風のように広がり、すべてのものを振動させ、巨大な渦となって世界中に伝わっていきます。澄んだ銀のきらめきが世界中を充たし、あらゆるものを鮮やかに照らし出していきます。その中で闇がかげろうのように消えていきました。四枚翼の闇の竜も、光に照らされた影絵のように、薄く薄くなって、吹きちぎられていきます。竜の咆吼が世界中を震わせ　やがて、聞こえなくなります

リグトが再び目を開けたとき、銀の光はもう消えていました。

そこはさっきの城の一室でした。ダイダがリグトをしつかりと抱きしめていて、ほっとしたように言います。

「戻ってきたな」

リグトはあたりを見回しました。崩れ落ちた天井から青空がのぞいていて、仲間たちが茫然とそこを見上げていました。闇の竜の黒い姿は、もうどこにも見当たりません。

リグトは尋ねました。

「闇の竜は……？」

ダイダは、おや、という顔をしました。

「しゃべれるようになったのか、リグト。あいつは消滅したよ。もうどこにもいない」

リグトは、ふいに、ぎくりとしました。部屋の中にぼつんと残された椅子に気がついたのです。そこにはもう、誰も座っていません。

とたんに体の奥底から震えが湧き上がってきました。止めようと思っても、どうしても止めることができません。声まで震わせながら、リグトはまた尋ねました。

「ダイダ……クリスナイは……？」

青年は何も言いませんでした。ただ、他の仲間たちが見上げている空を、黙って示して見せました。青空には日の光が明るく輝いています。

リグトは泣き出しました。耐えられないほどの喪失感に襲われて、ただただ泣きじゃくります。

すると、ダイダがまた言いました。

「泣くな、リグト。クリスナイに言われたらどう？　彼女は俺たちのそばにいるんだ。光があるところなら、いつでも、どこにでも、彼女はそこにいる。たとえもう、見ることも、触れることもできなくなっ

てもな  
」

ダイダの声がとぎれました。こみ上げてくるものをこらえるように息を止め、拳を強く握ります。

その一方の手が何かをすでに握りしめていました。金色に輝く丸い石です。不思議なほど心惹かれる輝きを放っています。

「聖なる守りの魔石だ」

とダイダが言いました。

「みんなを守りたいという、ユリスナイの純粋な想いから生まれてきた。ユリスナイの忘れ形見だよ」

リグトは泣きながらその石を見つめました。ダイダの手の中で、石は静かな金色に輝き続けています……。

すると、ふいにその光景も揺らめいて薄れ始めました。ダイダも仲間たちも城の一室も、急速に遠ざかっていきます。

驚いたようなダイダの声が聞こえてきました。

「おまえも行くのか！」

景色が色の入り混じった流れに変わっていきます。人の気配も話し声も、たちまち押し流されていきます。

その中でダイダが言っていました。

「そうか、元いた所に戻るんだな、リグト。また 会えたらいいな」

笑うような声が遠ざかり、聞こえなくなってしまう。

そして まったく別の景色がリグトの目の前に広がりました。

石造りの部屋の中で、大勢の大人たちがリグトを取り囲んでいました。全員が黒い星空の衣を着ていて、わっと声を上げます。歓声です。

「良かった、帰ってきましたぞ！」

「無事だったな。なによりだ」

それは天空の国の塔長や導師たちでした。リグトは自分の時代、自分の世界に戻ってきたのでした。

リグトは驚いてあたりを見回しました。修業の塔の一室、自分を囲んでいる人々。自分が魔法の暴走に巻き込まれて飛ばされる前と、あまり変わりが無いような気がします。向こうの世界でリグトは一年半の時間を過ごしてきましたが、ここではそれほど時間は過ぎていなかったのです。

そんな大人たちの後ろから、突然少年の声が上がりました。シューバです。見えない魔法の戒めに捕らえられた格好で座り込み、わめきちらします。

「リグト！ 死に損ない！ よくも戻ってきたな！ そのまま行きっぱなしになってれば良かったんだ！」

これ！ と導師の一人がたしなめ、シューバはたちまち口がきけなくなりました。恨みを込めた目でリグトをにらみつけてきます。

塔長がリグトの前に立ちました。

「塔の中でとてつもない魔力が動いたのを感じたので、あわてて戻ってきたら、そなたはどこか別の場所に飛ばされた後だった。追うこともできないほど遠くだったので案じていた。まことに、無事で良かった」

リグトは思わず目を伏せました。何をどう言っているのかわからなかったのです。リグトが向こうの世界で経験してきたことは、あまり

に信じがたいような出来事でした。無事で良かった、と軽々しく喜ぶことさえできないくらい。

すると、導師の一人が言いました。

「しかし、その姿はどうしたことだろうな？」

姿？ とリグトは自分自身を見回しました。とたんに、目の端をきらりと輝きが横切ります。それは自分の髪の毛でした。肩を越して背中の真ん中まで伸びたリグトの髪は、黒から、輝くような白銀に変わっていたのです。まるで、光そのもののような色合いです。

「強い光に焼かれた痕があるな。光源のようなものに近づいたのかね、リグト？」

と塔長が尋ねました。リグトはやっぱり何も言えませんでした。ただ、きらめく世界の中で、最後にユリスナイが髪を撫でてくれたときの、優しい手の感触を思い出します。

そこへ、塔の外から別の大人が飛び込んできました。あわただしく塔長たちに何かを伝えます。塔長や導師たちはいっせいに顔色を変え、少しの間、話し合ってから、おもむろにリグトへ向き直りました。少年のリグトへうやうやしいほどに頭を下げて、こう言います。

「たった今、天空王様が亡くなられました。これからはあなたが新しい天空王です、リグト様」

リグトは目を見張りました。天空王？ 自分が？ 信じられない想いに、ただただ混乱します。

すると、床の上に座り込んだシューバが、また大声を上げ始めました。魔法でことばを封じ込められているので、まるで熊か牛のようになりまます。新しい天空王になったリグトを憎み、妬んでいることが、表情からはつきりと伝わってきます。

そんな少年を見て、塔長がリグトに言いました。

「先の天空王がいなくなられたので、彼の処罰はあなたに委ねられま

した。彼は優秀なあなたの存在に嫉妬して、あなたを魔法の暴走に巻き込んで殺そうとした。どうぞ正義に基づく処分を、天空王様」

リグトは立ちすくみました。青い顔でまだリグトをにらみ続けるシューバを見つめます。恐怖、怒り、悔しさ。そんなシューバの感情がリグトの胸にも伝わってきます。自分自身ではどうすることもできない、妬む心の苦しさも。

リグトは痛みをこらえるように目を細めました。シューバに近づいていくと、そっと手を伸ばします。

「そんなに苦しむことはないよ」とリグトは言いました。

「苦しみを忘れさせてあげる。それが、君への罰だ」

リグトの手が触れたとたん、シューバの顔つきが変わりました。怒りの表情が解けて消えたようになくなり、素直な少年の顔になってしまします。きよとんと見上げてきた彼へ、リグトは話しかけました。

「ぼくが誰かわかる？」

シューバは首をかしげました。光そのもののようなリグトの髪をまぶしそうに見上げます。

「先輩ですか……学校の？ お見かけしたことはなかったですけど」

リグトは思わず苦笑しました。リグトは向こうの世界で二年半の間を過ごしてきました。その間に、彼は先輩だったシューバの年齢を追い越してしまっていたのです。

ほう、という顔をしていた塔長が、穏やかに話しかけてきました。

「シューバ、こちらにおられるのは、新しい天空王だ。これから天空の国を導いていく、正義の王であられる」

とたんにシューバは驚き、次に顔を輝かせました。

「お お目にかかれて光栄です、天空王様！ あ、ありがとうございます！」

リグトを妬んでいたことも、リグトを陥れたことも、何一つシュー

バは覚えていませんでした。本当に嬉しそうに顔を染めるシユーバを、リグトは悲しくほほえみながら眺めました。

「新しい天空王は慈愛の心を学びましたな」

導師の一人が隣の導師にささやいていました。そんな内緒話も、リグトの耳には、はつきりと聞こえてきます。

リグトは目を上に向けました。入り口も窓もない塔の一室。その石の壁の向こうに広がる青空を見上げます。空には、まぶしい日の光があふれています。

銀の鏡のような水面が揺れて、そこに映った塔の中の光景を消していきます。少年たちや塔長、導師たちの姿もさざ波の中で消えていきます。

代わりにその水面に立ったのは、一人の老人でした。光の加減で金にも銀にも青にも見える、不思議な色合いの長衣を着ています。その輝くように白い髪とひげは長く、先端は足下の水面に溶けて見えなくなっていました。

泉のほとりに立っていた天空王は、深く一礼しました。

「これは 泉の長老」

そこは天空の国の中庭にある、鏡の泉のほとりでした。銀の髪とひげの天空王は、そこでずっと水面に映る過去の出来事を眺め続けていたのです。

「久しぶりで懐かしいものを見せてもらうた」

と泉の中から姿を現した老人が言いました。まるで水底から聞こえてくるような、不思議な響きの声です。老人は、魔の森にある金の泉の長ですが、同時に世界中の泉と川の王でもあり、水を通じて、あらゆる水辺の出来事を知ることができるのです。

天空王はほほえみました。

「先だってミコンのユリスナイの都から帰ってきたばかりです。つい、あの頃を眺めたくまりました」

泉の長老はうなずくと、水面をすべるように歩いて、天空王の隣にきました。並んで鏡の泉の表を眺めます。そこにはもう、何も映ってはいませんでした。修業の塔の中の光景も、大昔の天空城の光景も。

長老がおもむろに口を開きました。

「ユリスナイと仲間たちが天空の国を作り、天空城を作ったのは、今からもう三千年以上も昔の出来事じゃ。あれから本当に長い時間が流れた」

「私が修業の塔から飛ばされてその時代に行き、ユリスナイたちに出会ってから、もう三十年あまりがたちました」

と天空王が穏やかに答えます。長老はまたうなずきました。

「そうじゃ。あの時からまた、ずいぶん時間がたったな、リグト」

老人から名前と呼ばれて、天空王は微笑しました。その髪とひげは今でも光そのものような銀色のままです。最後にユリスナイが触れてから、二度と元の色には戻らなかったのです。

天空王は目を上げて、青空を見ました。今日も空には明るい光があふれています。

「結局、ユリスナイは闇の竜を完全に消滅させることはできませんでした。一度は消えても、世界に再び闇の想いがよどんだとき、そこから竜が復活してきたからです。平和な世の中は、天空の国でも地上でも、千年の間しか続きませんでした」

「そうじゃ。世界は再び、光と闇の魔法戦争に巻き込まれていった。

それが今から二千年前の出来事じゃ。そして、闇の竜は世界の最果てに幽閉され、今に至っている。闇の竜は、今は影の存在じゃ。二代目の金の石の勇者たちが勇敢に戦っておる」

二代目の金の石の勇者たちというのは、フルートとその仲間たちのことです。

少しの間、考えるように沈黙してから、天空王はまた言いました。「ユリスナイは光を呼ぶ魔法を、この世に残していきませんでした。

誰かが同じ魔法を使うことを恐れたからです。ですが、ユリスナイの想いが結晶化した聖守護石だけは、彼女の魔法を覚えていました。ただ、あの魔法は人を媒体にしなければ発動しないので、石は、共に世界を守ってくれる勇者を捜したのです」

「それに応えて現れたのがフルートじゃな」

と長老が言いました。長いひげをしごいて続けます。

「だが、金の石と勇者の二人だけでも、闇の竜を完全に消滅させることはできません。人の心から闇を消すことはできませんからじゃ。その不可能を可能にするためには、願い石の存在がどうしても必要じゃった。そして、彼らは定めに従って、願い石とも巡り会った」

「魔力たちが変わり始めております」

と天空王が言いました。ほほえむような口調です。

「石たち自身、まだ気づいてはいないかもしれませんが、彼らもフルートを守ろうとしております。勇者の仲間たちは、全員が勇者を定めから守ろうとしているのです」

泉の長老はうなずきました。

「良いことじゃ……。ユリスナイは自分と同じ定めを他の者が背負うことを望んではいなかった。フルートたちには、定めを越えた道を見つけてもらいたいものじゃ」

天の王と泉の王は、そのまましばらく黙り込みました。三千年以上も世界の上空を飛び続けている天空の国を、今日も爽やかな風が吹き

抜けていきます。

やがて、天空王がまた口を開きました。それまでとは少しだけ違った口調で話し出します。

「私は、今でも時々夢を見ます。三千年以上も昔の、あの時の夢です。夢の中では私は少年のまま、ユリスナイもあの頃の姿のまま出てきます。あの時、彼女が光になっていくことは、世界のためにもうしても必要なことでした。世界の未来を守るために、彼女はどうしても行かなければならなかった。ですが、それは、わかっているのに、夢の中で、私は彼女に言い続けるのです。行かないでくれ、ぼくのそばにいてくれ、と。引き止めるのは正しくないとわかっていのに、私は正義の王であるのに。やっぱり夢の中では、私はそう言い続けているのです。三十年以上もたった今でも」

「三十年が三千年になっても、それは同じことじゃよ、リグト」  
と泉の長老は穏やかに言いました。

「わしもまだ心の中でユリスナイに恨みごとを言っておる。よくも一人だけで行けたもんだ、おまえは本当に俺の気持ちなんか考えていない、とな。何かに夢中になると、他はまったく見えなくなつたのが彼女だ。自分がどれほど残酷なことをわしに頼んでいったか、これっぽっちも気づいていなかった。それが悔しくて、わしは彼女の残した石をずっと守り続けた。初代の勇者が現れるまで千年間、それからフルートが現れるまで、さらに二千年間。仲間たちは皆、自分の時間を終えてこの世界を去っていった。カイトもキータライトもヒールドムも……。だが、わしだけは人の体を捨て、泉の長老となってこの世界に残り続けた。ユリスナイがすべてをかけて守ろうとしたこの世界を、最後まで見届けたいと思つてな」

「そして、自分の時代に戻ってきた私と再会した」

と天空王に言われて、長老は苦笑しました。

「そうじゃな。三千年あまりの時間は本当に長かった。わしもすっかり年老いたがな」

「それでも、あなたがいてくれて私はとても嬉しかったですよ、ダイダ」

と天空王は言いました。

泉の長老は、再び静かな微笑を浮かべました。

「それも懐かしい呼び名じゃ。本当のユリスナイを知る者同士、あの頃を懐かしみながら若い勇者たちを見守るのも、良いかもしれんな」

銀の鏡のような水面は、いつの間にか金の鎧兜の優しい勇者と、その仲間たちを映していました。彼らは元気に話し合い、次の場所を目標として旅立とうとしています。

そんな姿を見つめながら、泉の長老は力強く言いました。

「生きる。未来へ向かって生きていけ。それがユリスナイの悲願じゃ」

「そして、幸せになりなさい、と。彼女はそうも言っていました」と天空王が応えます。

かつて少年だった天の王と、かつて青年だった老人は、泉の上の少年少女たちを見守り続けました。二人の上にも、少年少女たちの上にも、日差しはまぶしく降り続けています。

それはユリスナイの慈愛の光でした。

(2008年7月18日)